

「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2020」(中国語版)

入賞作品

目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」(日本語訳) 一等賞作品		
寧波大学図書館与信息中心 教師教育学院基礎教育学部	周喬澤	3
浙江越秀外国語学院 網絡傳播学院	王詩妍	6
北京化工大学 材料科学与工程学院	余韋瑋	8
中国傳媒大学 電視学院	韋雨果	10
四川輕化工大学 外語学院	孔勁閣	12
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」(中国語原文) 一等賞作品		
寧波大学図書館与信息中心 教師教育学院基礎教育学部	周喬澤	16
浙江越秀外国語学院 網絡傳播学院	王詩妍	18
北京化工大学 材料科学与工程学院	余韋瑋	19
中国傳媒大学 電視学院	韋雨果	21
四川輕化工大学 外語学院	孔勁閣	22
★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」(中国語原文) 二等賞作品		
上海交通大学 材料科学与工程学院	彭宏宇	25
鞍山師範学院 外国語学院日語学部	宋科淇	27
西南石油大学 石油与天然气学院	吉義天宇	28
北京化工大学 文法学院	王驛塵	31
大連外国語大学 日本語学院	王燕	32
中国科学技術大学 科学島分院	張兰	34
中南大学 交通運輸工程学院物流工程学部	陳楚婷	36
北京大学 北京大学物理学院物理学	李一一	38
武漢大学 信息管理学院	黃靖	40
安徽外国語学院 國際經濟学院	高輝	42

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(中国語版)

一等賞作品

(日本語訳)

改作でテキストがうろつかなくなる

寧波大学

図書館与信息中心

教師教育学院基礎教育学部 2年

周喬澤

テキストが付いたり離れたりすることで、入り組んだ複雑な文学の世界が構成されています。否定できない事実のひとつとして、多くのテキストはうろついています。「古くさい」解釈の固まった作品でも、新しく生まれた手探りの作品でも、片隅にとらわれていると世間の人から関心を得られず、独りうろうろするほかないのかもしれないかもしれません。このような状況は今の文学界では珍しくありません。この難題について、二人の日本の作家が一定の現実的な道を探し出したようです。

太宰治の『お伽草紙』の「舌切雀」は、日本の昔話「舌切雀」を改作したもので、乙一の『箱庭図書館』に到っては全作がネットに投稿された作品の改作です。改作はオリジナルのように独立して存在するものではありませんが、改作の持つ進化と昇華の意味は軽視できません。

改作は時代の襁褓の中で生まれ、個人の意識を先人の文字にしみ込ませて豊かな血肉と新しい魂をもたらすことができます。太宰治の「舌切雀」は決して単純な引き延ばしではありません。かつて教化に適していただけの、善良を賛美する寓話が、より複雑で深いテーマの、太宰治の個人の特徴を帯び時代を映し出した小説に書き直されているのです。彼はこの作品の冒頭で制作の意図を、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰労のささやかな玩具として恰好のものたらしむ」と表明しています。身分制度に基づいた教化のテキストはもはや必要とされておらず、分かりやすく新しい発想の小説こそ生命力を持つのです。「お爺さん」と「お婆さん」の世間話は、もともと戦争のストレスで精神のやせた人の話の種に適しています。このような物語は、ただ浅く読むだけでも多くの面白みが

あります。「おれは何もしてみないやうに見えるだらうが、まんざら、さうでもない。おれでなくちや出来ない事もある。おれの生きてゐる間、おれの真価の發揮できる時機が来るかどうかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつて大いに働く。」ここで「お爺さん」が前向きな言葉を含めているのは、戦時中の人々の希望に対する渴望に合っています。

太宰治は誰でも楽しめることを保証すると同時に、自分の文学の追求を放棄していません。本を読んでばかりで欲求がないと自称する「お爺さん」と、俗っぽくて無知だが心を尽くして「お爺さん」の世話をする「お婆さん」は見たところ完全に対立する人物ですが、実際には互いに入り交じっており、二人の間の鋭い対立の細かい描写は当時の人間性の縮図を描写したものになっています。また、作者は原作の流れにも手を入れています。中でも目立つのは結末部分の加筆です。お爺さんはお婆さんの持ち帰った金貨のおかげで一国の宰相になり、最後にいつもと全く違って妻のおかげだと感慨を覚えています。これはお爺さんが自分の本来の姿をそれなりにわかまえているということで、作者による功利主義のへ風刺と当時の日本社会対抗に対する再考です。太宰治の書き直しにより、古くさいテキストが実際に体験したことのように感じられる血肉と時代の魂を手に入れました。もともと永遠にその場をうろろろしていたであろう古典が前へ歩きだし、文学の意味の上の溝を打ち破って、後世の人と交流し共鳴する能力さえ得たのです。

太宰治の改作をうら寂しいと言うならば、乙一の改作は賑やかなものです。「オツイチ小説再生工場」という企画を通して、ボツになったネット小説の原稿がいくつか乙一の靈感の源になりました。『箱庭図書館』のあとがきで、乙一は小説の創作過程を述べ、彼の選出した文章の長所と欠点を講評しました。内容の混乱した作品であっても、未完成さに優れてさえいけば、彼の手で新たな生を得ることができます。敢えて原作の世界を書き換える筆致で尊重、描写、傾聴したものが、最終的に作品になるのです。こうした書き直しは未熟な原作者にサプライズの可能性を感じさせ、またまた著名な作家の靈感で原作の穴を埋めるものです。乙一は「この作品を書いたことで自分が少しは成長したようだと感じる」と明言しています。こうした創作モデルには怠惰の疑いが持たれるかもしれませんが、明らかに賑やかな、思想と思想の衝突で、経験と革新の融合です。『箱庭図書館』の裏で、若い思想の火花が経験豊富な作家の言葉により消える運命を回避し、「乙一」という燃料の助力のもと、きらりと光る光芒が自身の束縛を抜け出して世界に放たれたのです。

二人の作家は実のところ異なる闘いに関わっており、片や時代、片や経験ですが、いずれも日本の文学の発展に向かって始めた闘いです。日本の文脈はその位置する地震帯のように揺れて打撃にあっても壊れることはありません。2人の作家の改作は新しい手術の術式のようなもので、日本社会の進化と共に精神上的の激しい揺れ動きを形成しました。戦争がもた

らしたのは社会背景の変化のみならず、文化のあり方の巨大な割れ目でした。それにより日本の文学に戦前、戦中、戦後とはっきり異なる傾向が現れています。太宰治の改作は、その場をうろうろし、危機の到来にまるで気づかなかった日本の伝統文学を再生させる救済です。日本が凝り固まっている今の時代、どんな固定の文学形式でも功利主義のもと融通が利かないものです。改作そのものが退化して無味乾燥な経験にさえなってしまう。乙一の改作は文学の発展の最も重要なものを捉えて、経験と低俗な選択との対抗を利用している貴重なもので、日に日にだらける日本のライトノベル産業に対する間接的な洗礼だといえます。改作は2人の作家の個人の意志に基づいており、日本の文学の成長と墮落が織りなす伝承を証明するものでもあります。

時代に迎合してあまりにも媚びへつらうと、正道に反してまた滅亡に向かうでしょう。時代の難局に直面して、日本の作家であれ中国の作家であれ、歴史に埋もれた作品を意識的に拾い上げ、自分の筆致で「磨き上げ」てこそ、世界観と方法論が歴史的な文脈から逸脱するのを防げるのです。市場経済が経験の価値を強調し、慣れない革新は大衆に受け入れられにくいため、「再生工場」の形式はやむなく「下がることで進む」傾向を見せています。落ち着きのない社会背景のもとで、まだ汚染されていないテキストを引き立てれば、ある程度は芸術の惰性を克服して、文学市場を革命の発展へと導くことができます。

書籍はテキストで構成されています。テキストが足踏みしては、書籍も結果的に行き詰まってしまう。テキストの圧迫と束縛は、文学の従事者が自分のペンで解き放ち、人々の目で開く必要があります。改作の働きは多くの作家の実践のもとで証明されており、テキストが前へと踏み出す道です。日本、中国、そして世界の文学は、いずれも明るい空の下で模索しており、改作の他にもより多くの道を急ぐ必要があるようです。

読んだ図書：

『御伽草紙』（天津人民出版社）

『箱庭図書館』（人民文学出版社）

坂道に立つ女性たち

浙江越秀外国語学院

網絡傳播学院 4 年

王詩妍

私たちはだれでもない、母親でもなく妻でも、だれかの娘でもない。

— 『坂の途中の家』

『坂の途中の家』は角田光代が書いた小説です。主なあらすじは、小さい子供のいる里沙子が補充裁判員として我が子を虐待死させた母親の裁判に関わります。被告の水穂が八か月の娘を溺死させた事件です。審理が進むにつれ、里沙子は水穂と自分の境遇に近いことに気づきます。仕事を諦めて育児に専念し、苦勞しても当然だと思われ、夫は育児に参加せず、家庭内の冷たい暴力と歪んだ愛……裁判の最後に水穂は有罪となって入獄します。作者は里沙子の口を借りて「それは水穂のことではなく、私のことだ」と言わせ、現代の主婦の苦しい立場を率直に述べています。

女性のすべてが主婦になるわけではありませんが、『坂の途中の家』がこれほど好評なのは、角田光代が作品中で深刻な現実、女性の育児と自分の途中の家』価値との間にある巨大なギャップを暴露しているからです。こうしたギャップはほとんどすべての女性の生命の中に横たわっているものです。私たちは主婦であろうがなかろうが女性です。育児と女性はきつく結びつけられており、そのために社会環境は女性すべてが結婚して子供をもうけることを黙認しています。

すべての女性の生命の中に、直面せざるを得ない可能性が存在します。自分はいったいあの坂道に立つ女性になってしまうの？家庭のために自分がもともと得られるすべてを犠牲にしなければならないの？

「女は弱く母は強し」という言葉が広く伝わっています。平凡な女性が結婚して母親になるとなんでもできるように変わるとされているようです。この言葉は母親を賞賛するものですが、男権社会が母親の身にかぶせる圧迫と束縛でもあります。社会は母親たちを祭壇に押し上げますが、母親たちが「母は強し」を実現できないと、こぞって非難するのです。作中の里沙子と水穂もそうです。彼女たちは仕事をあきらめ付き合いを失い、すべてを子育てに差し出したと言うべきですが、子供が言うことを聞かなかつたり他の子より劣っていたりすると責められるのはやはり彼女たちなのです。身動きの取れない母親たちは心に悩みがあっても解決できず、周囲人は「母性本能」でお茶を濁すばかり。

作中では決して激烈な言葉の衝突を描写していません。激しい罵り合いはなく、対立の爆

発はすべてひっそりと静かです。言葉の暴力は柔らかく温和に彼女の考えた言葉を包み込んでいるようで、悪意が察しにくいものになり、まして抵抗するなどあり得ません。さらに恐るべきことはそうした悪意が常態になり、主婦自身さえ思考と決定を放棄して、そうした扱いを黙認し、自分が他の人に及ばないことを黙認して、最終的にすべてを失って沈黙するほかなくなり、弁解のできない操り人形になってしまうのです。

角田光代は以前、自分の創作の原動力とアイデアは怒りから生まれ、不公平な扱いを受ければ黙ってられないのだと語っています。彼女の作品では、母性本能に困惑し、育児と仕事のバランスにもがき、自己の女性のイメージを探そうと試みれば枚挙にいとまがありません。『八日目の蟬』では、不倫相手の赤子を誘拐して母としての愛を注ぎ四年間育てた野々宮希和子が逮捕されたときの最後の一言は「その子は朝ごはんをまだ食べていないの」自分が産んだ子供ではなくとも、希和子はやはり母親なのです。『対岸の彼女』では、離職から五年で職場に戻った小夜子が会社、保育園と家の間で奔走して、自由で垢抜けたキャリアウーマンの友人をうらやんでいます。そして『坂の途中の家』で影の重なり合う里沙子和水穂は、石ころ一つ投げ込んでさざ波を立てるぐらいで二人の境界線が崩れてしまいます。母親たちがそれぞれ愛と絶望を抱いていても、社会が少しも耳を貸さなかったため、悲劇が起きたのです。

角田光代が描いた物語は警句のようなものだと思います。社会の不公平さに対する警句です。彼女は社会の共通認識の中に潜む女性への悪意を探し出して、赤裸々な真実を読者に示しています。それまで、そうした悪意は部屋の中の象でした。存在していても、私たちは見て見ぬ振りしていたのです。

女は男に及ばない、女は理系に向かない、女は家で子供の世話をすべきだ、女には論理的思考がない、女は理不尽だ……こうした型通りの印象は女性の成長段階に伴ってきます。自ら懐疑を繰り返す中で、女性はずいぶん環境のせいで型通りの女性になってしまうのです。

注意すべきことは、ここ数年来女性のエンパワーメント運動が盛んに発展していることです。Me Too運動やその韓国での広がりは多くの女性から支持が集まりました。女性の意識が次第に目覚めるにつれて、女性を描写した作品が多くに関心と呼んでいます。ここまで紹介した本の他にも『82年生まれ、キム・ジョン』、『ブラックボックス』、『房思琪の初恋の楽園』、『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』なども幅広い女性の共鳴を起こしています。女性作家は読者達と一緒に、型通りの印象を変えるべく力を尽くして、圧迫と性差別に反対し、互いに自己の価値を実現することを励ましています。

『坂の途中の家』を原作とするドラマで、裁判長は「はじめての育児に戸惑っているなか、周囲の人の言葉、夫の大声や罵声に恐怖を感じて、さらに自信をなくしたこと、だれにも助

けてもらうことができなかったことや、助けを呼ぶこともできなかったことは、事実としては否定できない。被告人の罪は被告人が独りで犯したものだが、元をたどれば、本件に関わる、被告人の夫と家庭の構成員などを含むすべての人の各種の状況の混ざりあった結果、最終的に被告人にもたらした巨大な心理的圧力が根本的原因である」と話しています。

水穂の悲劇は起きてしまったことですが、元をたどれば社会の悲劇であり、こうした悲劇が里沙子にも繰り返されるのをどう防ぐべきなのかは、一人一人が深く考え努力するに値します。私たちの誰にも里沙子や水穂になる可能性があるからです。そして世界中の女性一人一人が彼女自身であることを心から期待しています。

人生はつかの間、風の歌を聴け

北京化工大学
材料科学与工程学院2年
余韋瑋

あらゆるものは通り過ぎる。誰にもそれを捉えることはできない。僕たちはそんな風にして生きている。

——前書き

日本の文学に言及するなら、村上春樹の名は避けて通れるものではありません。東野圭吾、川端康成がどれほど好きだろうとも、村上春樹を見ながら見ないふりをすることはできません。彼の作品がとっくに海を渡っており、タンポポのように広い世界で根を下ろし芽吹いているからです。かなり前から村上先生のお名前はうわさに聞いていましたが、古い観念の大きな山（自分は文学の大家の本を読んでも分からないと感じる）が横たわっていたので、村上先生の作品を読むのが遅くなりました。ある年の誕生日、友人が何気なくくれた本を一目見てはっと気づいたのです。

この小説は村上先生の作家生活のスタートで、自分が初めて知った作品でもあります。小説の内容はとても平凡で、夏にある少年と少女が知り合うというものです。言葉遣いが率直、流れもシンプルで、曲折や起伏がありません。語調も淡々としているのですが、なんだかすっきりせず、その引っかかりが何かを表しているようです。誰しも青春時代に経験する矛盾のように、知られたいくはないのに理解を渴望するもののような。

初めてこの本を開いたのは、高校に入った年でした。ぼんやりしていた自分は恋愛を渴望

しており、作中の少年のように、好きな女の子に近づきたいことははっきりしているのに唯々諾々としていて、失ってからそのことに気づきました。愛していてもできない憂いと悲しみを味わうことしかできなくて、心痛は言葉に表せないものでした。ちょうど村上先生が「僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。」と書かれたように。

二度目にこの本を開いたのは、三年のときでした。大学入試に失敗して、生活の苦痛に耐えていた自分は、またぼんやりとこの本を読んだのです。当時は憂いも悲しみもなく、後悔の心情でした。作中の少年が大事な少女を失ったように、自分も人生で一番大事な転機を失いましたが、自分を慰める術が身につきはじめていました。逃したものはもう取り戻せないことも少しずつ分かってきました。たとえ力を尽くして求めても徒労は徒労です。大学入試に失敗した無念さは永遠に存在するかもしれません。ちょうど作中にあるように「しかしそれはまるでずれてしまったトレーシング・ペーパーのように、何もかもが少しずつ、しかしとり返しのつかぬくらいに昔とは違っていた」のです。

三度目にこの本を開いたのは去年でした。高校の本を片付けていたとき偶然に書棚の隅で見つけ、一枚一枚なじみのある紙をなでて、だんだんその中に浸っていきました。一章また一章と読み進めるうち、自分の昔の純真さに感慨を覚え、失敗した時の悔恨に感嘆しました。村上先生が執筆するときもかつての自分に思うところがあったのかな、とよく思うようにもなりました。

「今愁いの滋味を識り盡くし、説かんと欲すれど還た休み。説かんと欲すれど還た休み、卻って天涼しく好き秋と道う」〔訳注：ここは村上作品と関係なく辛弃疾（1140-1207）の『醜奴児』の一節です〕人生を振り返ってみると、大したことはありません。遠出した日のことをまだ覚えています。雑用を放り出して、こぎれいな戸口にたたずみ、緑茶のグラスを揺らして過ぎた時間を思い、心をリセットしました。心に絡みついた煙のような昔のことを捨て去って、すべての悩みを忘却し、心の扉を開け放して、最後にこの本の物語を味わってみると、ぼんやりしているうち、勇気を奮い起こして告白する少年が目に見え、涙を浮かべて失敗に向き合う少年、過去を笑いながら気づかぬうち涙にむせぶ少年が。夜が更けて人が寝静まったころ、友人から電話があり、本の中に浸っていた自分は我に返りました。だらだらしゃべるうち、友人に近況や今の気持ちを訊かれ、人生はつかの間だと言い切ろうと思いました。しかし、彼が想像を通じて私の張り裂けた心を継ぎ合わせるはずはありません。でも、この長い夜が通り過ぎた景色を変換することはないことは分かっています。二度とペン先を騒がせることもありません。昨日の話を繰り返すことしか、友人に質問される空間に

いることしかできないのです。孤独で寂しい気持ちをペン先に付け、ぼんやりとした追憶を書きます。贅沢で享樂的な都市の真ん中で、生活に鋭気を削がれた自分は、青春の情熱と勢いを取り戻すことはなく、のんびりした生活を望むようになってきました――暑さ寒さをしのげる質素な家。中にはじゃれついてくる犬や猫。こまごましたことが無数にあり、開けた道はなく、冬には酒を飲んで、雨の夜には安眠するような。

席慕容の言葉に「青春はあまりに慌ただしい本だ」というものがあります。過ぎていく青春は、茫漠として、頑固で、浪費する歳月で、しなやかでゆったりとしているのに心の扉をノックしてきます。今日に至ってもなお、この本の最も分かりやすい道理を味わうことしかできなくて、本当に村上先生の表現したいものを体得することはできていません。しかし作中の場面は鏡のように、ぼんやりと私自身の姿を映しています。

最後に、この本の最も好きなフレーズで結びたいと思います。「幸せか？と訊かれれば、だろうね、と答えるしかない。夢とは結局そういったものだから」。人生はつかの間、『風の歌を聴け』を味わってみてください。

二律背反—『菊と刀』¹を読んで日本の感性について得たもの

中国傳媒大学
電視学院2年
韋雨果

初めて見た日本は、モダンで地味な国でした。東京タワーに上ると遠い富士山の澄みわたる美しさを眺められ、スカイツリーのそばでは隅田川の清らかさを望めました。神社の傍を新幹線が飛ぶように走り、鳥居の外にある空港は往来が盛んでにぎやかでした。自然と人文が交わり、古さと新しさが衝突し、静謐と喧噪が重なり合う地でした。「万物並び育て相害せず、道並び行われて相悖らず」〔訳注：『論語』中庸〕という言葉があるように、東京の盛んな車の往来から北海道の生い茂った林が積み重なる青緑色まで、日本列島には調和しつつ万物が納まって、互いに照り映え、侵害しあわず存在していました。

再び日本を見たのは、アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトが著した『菊と刀』を通してです。この本で彼は、日本の近代に急発展した物質の成果を捨て、精神面から日本

人と大和民族の性格を探究しています。この本を読んだ後、自身の日本に対する第一印象が、波がきらきらと輝く日本の氷山の一角に過ぎなかったと気づきました。日本はもっと重層的で、探求、発見、検証の待たれる要素も含まれていたのです。読み終えて気づいたことは、複雑さ、対立、互いの矛盾さえ、とっくに日本の文化の各方面に染み渡っているということです。

日本人は美を愛しつつ武力を乱用します。「月さすや谷をさまよふ螢どち」ⁱⁱ「もののあはれ」の美は江戸時代から風向き次第で夜に潜み、文学から文化に潜んで、日本の文化に不可欠な古い要素になっています。長谷川等伯はきわめて少ない線で数本の松の木を描きすぐ筆を収めながら、余白を生かして松林の深遠で静かなもの寂しさを描写していますⁱⁱⁱ。「幽玄」の美は百年前には浮世絵や水墨画の中で余白となり、黙々として日本人の独特な美学の文化の薫陶を受けてまた形作っているのです。大和民族はそれを自ら体験し実行して、一代一代と伝わって行って、「美を愛する」ことが国の主流になりました。しかし、古代の何度もの「合戦」であれ近現代の何度もの侵略戦争であれ、日本人は美を愛すると同時に美を壊し続けています。壊滅と殺戮の中で両手を鮮血で満たした日本の軍人は、それでも悠然と茶道や花道の美を楽しみ、自分の胸にある美が壊されると死をもって殉じました。秋の葉の静かな美のように、最後の一縷の美を添えていたのです。美を愛しながら美を壊す。武力を乱用しながら和を尊ぶ。

日本人は礼儀を尊びながらも戦いを好みます。祝日のたび神社の太鼓が響き、美しく輝くのは日本街頭の常態で、祝日に対する尊重と伝承が、懇ろに礼儀を尊ぶその心を実証しています。謙遜語と敬語は複雑に入り組んでいて難解で、なのにさまざまな人が柔軟に応用しており、日本の首相でも宿泊したホテルの掃除係に心からの感謝状を書くことがあります。言葉と顔色で人の心を探ることが身につけられず、礼儀作法が分からないと、日本社会では立脚しにくいものです。しかし武士道精神に支配された彼らは、自分が死ぬか相手が死ぬかという最も野蛮な方法で対立を解決するのです。仇同志が会うと、血しぶきが上がることになります。他人の生命を非情にも剥奪していながら、敵討ちは礼儀を尊ぶ社会の中では「無礼」ではないものと黙認されます。決闘さらには謀殺まで、法律の原理を越えて許され、尊敬されることさえあるのです。生命の軽視により彼らの礼を尊ぶ精神は拠り所を欠き、矛盾したものに歪んでいます。

日本人は新しいもの好きで頑固です。彼らは大化改新、明治維新、戦後の再建による天地

をくつがえすほどの変化を狂喜して受け入れながらも、とっくに時代遅れの煩わしい虚礼をなかなか変えられません。とっくにブルジョア革命を終えていながら天皇制の存続に固執。とっくに火器の時代に入っているのに、意地を張ってそれぞれ大戦場で刀を使い、かつて最も先進の大艦大砲を持っているながら、最も基本的なダメージコントロールと救援設備は不足……そのため、彼らは最も先進的な戦闘機を使って最も古い戦術である突撃を採用し、第二次世界大戦での悪名高い「神風特別攻撃隊」を結成し、新しいもの好きと頑固さを守ろうとしたのです。

日本人は服従しても飼いなさらません。彼らは最も苛酷な命令に従いながら、矛盾して最も基本的な規範に背くこともあります。彼らは切腹自尽であっても上級の指令すべてに進んで従いますが、下克上もよく起こっていました。戦国時代に家臣が大名家を転覆させ、大名が幕府を覆し、第二次世界大戦では下級の将校や士官が上官を暗殺する事件も頻発しています。規律が厳しい彼らは、同時に自由放漫で、両者はもともと共存できないはずなのに、ドラマさながら日本の文化の中で共演しています。

美を愛しながら美を壊し、礼儀を尊びながらも戦いを好み、新しいもの好きながら頑固で、服従しても飼いなされぬ。「並び行われて相悖り、並び育して相害す」が日本文化の現実になっています。こうした要素の抵触、矛盾、衝突、不均衡が寄り集まっているのです。現代日本の調和と暴力、謙虚さと積極性、モダンと古風、拘束と自由。すべては二律背反の中で盛んに芽生え、すべては二律背反の中で歪んで育ちます。『菊と刀』の中の日本は、難解ながら心を奪うものがあり、人を賛嘆させながら意気消沈させるものでした。すべては平行して生まれ、二律背反の中でなお近代日本が育ったのです。

仏法も王法も共に滅ぶ 比叡山の織田信長

四川軽化工大学
外語学院2年
孔勁閣

初めて織田信長という名前を知ったのは、某ゲームで少し中二病がかった「第六欲天魔王」

でした。戦国時代の日本人は自分に妙な名前を付けるのが好きだったのかと当時はおかしく感じていました。しかし後になってまじめに研究してから、この増長した名前の背後にあるものを知ったのです。比叡山の焼き討ち、一向宗の掃討、神権政治の衰亡、神聖なものではなく人間が主権を持つ国という織田信長の政治信条でした。宣教師ルイス・フロイスは「信長は全国の神像と仏像を集めた。彼の目的は決してそれらの偶像を崇拝することではなく、そうした神仏に彼を崇拝させることだった。彼は自分が神であり、彼の上に万物の創造神はいないと思っていた」と述べています。武田信玄が織田信長に天台座主 僧侶 信玄と署名した手紙を出すと、その返信には第六天魔王 信長と署名されていました。彼は仏教の魔王を自称することで他人に自分は神であると伝えていたのです。

彼は増長していながら、理知的でもありました。

794年に平安京が成立してから、寺院の勢力が前例のない強大さとなり、天皇の死や皇位の継承さえ和尚の手で密教儀礼を受けなければならないほどでした。中世日本の摂関政治と院政体制はまさに、このような神の権威の下で生じていたのです。10世紀中葉、武装した僧兵が出現。戦国時代には、公家、武家、寺院の三大勢力が並立していました。本願寺のように事実上の大名になってしまう例まで出てきました。

宗教の力は政治と結び付けるべきではなく、まして一国の基礎は宗教学であるべきではない、と織田信長は思い付いたのです。彼はすでにその時代の最前線を歩いていました。今の私たちは神の視角に立って、一連のローマ教会の暗黒時代の事例を挙げるのがたやすくできますが、信長の時代は、宗教は民衆の普遍的な信仰で、一地方に割拠する経済的政治的実体でした。彼が直面していたのは僧侶だけではなく、その背後にいるすべての人々だったのです。彼は天罰を恐れる明智光秀に対して「まだ分からないのか、仏像は金属と木に過ぎないのが」と話しています。彼が直面していたのは天罰ではなく、背後にある人の心でした。比叡山の大火はそうした金属と木を焼き尽くし、一向宗は全滅しました。武田信玄は仏法も王法も共に滅ぶと評し、今なお日本ではたくさんの歴史学者が信長を極悪非道と語っています。

彼は自らを天下人の反対側に置きました。

しかし彼はやはり天下を獲りに行き、後に引けなくなりました。織田信長の当時の目標は天下布武、日本統一でした。これほど大きい力を費やして宗教勢力に対処しても、実際にはその尽力が感謝されることはなく、分散している大名への対処は全国を網羅する宗教勢力よりずっと簡単でした。まして当時の大名は多くが仏教を信仰していました。政教分離の利点は一朝一夕に見えるものではありません。彼は当時の日本のみならず、後世の日本のためにもなったのでした。彼は無理な相談をせず、寺院の勢力を結びつけて絶えず併呑して拡大

していきました。彼の目は初めから後世に向けられていたのです。

彼の後は豊臣秀吉、徳川家康がその道を受け継ぎました。日本の長期にわたる宗教戦争が終結し、信仰は統合されて、しかも国家機関の運営や大衆の生活に関わらなくなったのです。

もしかすると数年前法華宗に帰依した織田信長は、遠からぬうち比叡山に矛先を向ける第六天魔王になると知らなかったかもしれません。本能寺の大火の中で織田信長は世の無常に嘆息していますが、何年も後にその血と火を代価に敷いた道が日本を束縛の中から救い出したことも知るよしはありません。

彼の一生は尾張の大うつけから織田家の家督を継ぎ、美濃の国の主となって、桶狭間の戦い、稲葉山城の戦い、比叡山の焼き討ち、京都閲兵、天下布武……そして本能寺の大火。織田家の寵愛を受けない非嫡出の長子から天下布武の第六天魔王まで、浮き沈み、勢いのすさまじいものでした。彼がもう少し長く生きていたなら、天下布武は本当に実現できていたのだろうかと思えます。彼は曹孟徳やエカテリーナ大帝を想起させます。彼らがもう少し長く生きていたなら、また歴史は違っていたでしょう。もしかすると慧極まれば必ずや傷なうということが真理で、人生の無常も真理なのかもしれません。

周作人が翻訳した『平家物語』の中に、「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」という詩があります。この出典は幸若舞の名高い「敦盛」です。もとは熊谷直実が平敦盛の殉死に捧げた舞いの歌でした。一ノ谷の戦いの時、平敦盛は熊谷直実の手にかかって命を落としましたが、子供のころからの親しい友人が刀を抜き合ったことに熊谷直実は世の無常を感じ、この歌を作ったとのこと。この歌を知る人が多いのは、織田信長が桶狭間の戦いの前夜と本能寺の変の前に詠じたからです。もしかすると本当に予言となってしまう、彼は世の無常を笑って今川義元を葬り、世の無常を嘆いて燃えさかる炎の中で一生を終えたのかもしれません。

しかし噂は永遠に噂です。その夜の大火の中で彼が何を思い何を語ったのかは永遠に分からないかもしれません。ただ一つ確かなことは、彼の一生が本当に歌の中にあるようなものだったことです。

人生の五十年は、天と比べればちっぽけなものにすぎません。

世事を見ると、夢幻で水のようなもの。

人生は一度きり、死はすぐそこにあります。

それこそが菩提の種、思い悩む心、胸にあふれる思い

……

天下に目を向けると、海と空の間で滅びぬものはありません。

一度生を享け、滅せぬものあるべきか。

一度生を享けたものが生き続けることはないのです。

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(中国語版)

一等賞作品

(中国語原文)

改写让文字不再徘徊

寧波大学

図書館与信息中心

教師教育学院基礎教育学部 2年

周喬澤

文字之间的拥抱与疏离，构成了纷繁复杂的文学世界。一个不争的事实是，有许多的文字在徘徊，也许是“老掉牙”的固化之作，也许是新生的摸索之作，被囚于一隅，难以被世人关注，只得独自徘徊。这样的情况在如今的文学界并不少见。而两位日本作家却似乎为这一难题探索出了有一定可行性的出路。

太宰治的《拔舌雀》改写自日本民间童话故事《舌切雀》，乙一的《箱庭图书馆》甚至整本书都是改写网友投稿作品而来的。改写虽然不如原创那样独立存在，但它拥有着不容忽视的进化与升华意义。

改写在时代的襁褓中生发，能让个体的意识渗入前人的文字，带来丰满的血肉与新的灵魂。《拔舌雀》绝非简单的扩写，而是把一个曾经仅仅适用于教化，歌颂善良的寓言故事改写成了主题更为复杂深刻，带有太宰治个人特色的时代映射小说。他在文章开篇便表明了自己的写作意图——好让那些为了让日本度过国难而奋斗着的人们于百忙之中能得到片刻的慰藉。基于阶级统治的教化的文字不再被人民需要，通俗又有新意的小说才拥有生命力。“老爷子”与“老婆子”的家长里短，本就适合作为战争高压下精神贫瘠之人的谈资，这样的故事即便只是浅读，也已经有不少的意趣。“我看起来好像是什么事都不做，其实满不是这么回事啊，有些事是非我不可的。我不知道能不能活到发挥我真正价值的那一天，可要是那一天真的来了，我自然会奋发努力，大有作为的。”这句“老爷子”含有积极倾向的言语，符合战争中人们对希望的渴望。

太宰治在保证雅俗共赏的同时，没有放弃自己的文学追求。热爱读书，自称无欲无求的“老爷子”和粗俗鄙陋但尽心照顾“老爷子”的“老婆子”看似是完全对立的人物，实际上却是相互交织，对两者间尖锐矛盾的细节描写成为时代与人性的缩影。除此之外，作者还对原

作情节进行了修改，其中最为明显的就是结尾处的增添，老爷子因为妻子带回来的金币成为一国宰相，最后一反常态感慨多亏了自己的妻子，这是老爷子对自己本来面目某种程度上的认清，是作者对功利主义的讽刺以及对当时日本社会的反思。太宰治的改写让古旧的文字拥有了可以让人感同身受的血肉以及时代的灵魂，原本可能永远徘徊于原地的经典开始向前走，打破文学意义上的生分，拥有了与后世之人交流甚至共鸣的能力。

如果说太宰治的改写是清冷的，那么乙一的改写则是热闹的。通过“乙一小说再生工厂”这一企划，一些网友未被采用的小说稿件成为了乙一的灵感源泉。在《箱庭图书馆》的后记中，乙一讲述了小说创作的过程，点评了他挑选出来的文章所具有的优点及缺陷。即便是内容混乱的作品，只要拥有很好的未完成性，就能在他的笔下获得新生。敢叫原作换新天的笔法尊重着，描摹着，聆听着，最终归于创作。这样的改写既让不成熟的原作者感到惊喜的可能性，又填补了老牌作家的灵感洼地。乙一言明：“写出这篇作品让我感觉自己好像有所成长。”也许这样的创作模式有偷懒之嫌，但这无疑是热闹的，是思想与思想之间的碰撞，是经验与创新之间的交融。在《箱庭图书馆》的背后，年轻思想的火花在拥有丰富经验的作家的笔下避开了熄灭的命运，在名为“乙一”的薪柴的助力下，璀璨的光芒挣脱了自身的桎梏而撒向世界。

两位作家其实是参与了两场不同的斗争，一场与时代，一场与经验，但同样都是面向日本文学发展发起的斗争。日本的文脉如同其所处的地震带常有颠扑却不灭，两位作家的改写像是新的手术术式，与日本社会的演进共同形成了一种精神上的激荡。战争带来的不仅是社会背景的改变，更是整个人文生态的巨大裂缝，这使日本文学在战前、战中与战后呈现出截然不同的倾向。太宰治的改写，是对徘徊于原地，浑然不知危机来临的日本传统文学重生式的挽救。而日本当下正处于一个相对板结化的时代，任何固定的文学形式都可能成为功利主义下的循规蹈矩，改写本身甚至都会退化为烂俗的经验。乙一的改写难得地抓住了文学发展的命脉，利用经验与粗俗的选择抗衡，不失为对日渐懒惰的日本轻小说产业的间接洗礼。改写基于两位作家的个人意志，又见证了日本文学成长与堕落交织的传承。

迎合时代过于谄媚，而悖逆它又会走向灭亡。面对时代的困局，无论是日本的作家还是中国的作家，都应该有意识地把历史的遗珠拾起，用自己的文字把它“擦干净”，才能使世界观与方法论不至于脱节。而市场经济强调了经验的价值，生疏的创新难以被大众接受，所以“再生工厂”的形式在无奈之下显现出“以退求进”的趋势。在浮躁而焦虑的社会背景下，对尚未被污染的文字进行提携，可以一定程度上克服艺术惰性，引导文学市场进行发展革命。

书籍由文字构成，如果文字徘徊不前，书籍也终将陷于停顿。文字的枷锁，需要文学工作者用自己的笔来松开，需要人民的眼睛来打开。改写的作用在众多作家的实践下得到了证明，是让文字不再徘徊的一条出路。日本、中国，乃至世界的文学，都在看似明亮的天空下摸索，除了改写，还有更多的道路急需去走。

所阅图书：

《御伽草纸》（天津人民出版社）

《箱庭图书馆》（人民文学出版社）

站在坡道上的女人们

浙江越秀外国语学院

网络传播学院 4 年

王诗妍

我们谁也不是，不是母亲，不是妻子，也不是谁的女儿。

—《坡道上的家》

《坡道上的家》是日本作家角田光代所著的小说，故事主要讲述了新手妈妈里沙子作为陪审员参加的一场杀婴案审判，被告水穗亲手溺死了八个月大的女儿，随着审判的深入，里沙子发现自己与水穗境况相似：放弃工作专心育儿，辛勤付出却被当作理所当然，丈夫在育儿上的缺席，家庭冷暴力和畸形的爱……在审判的最后，水穗获罪入狱，作者借由里沙子之口说出“因为那不是水穗的事，而是我的事”，直陈当代主妇的困境。

女性群体中并不是每个人都会成为主妇，但《坡道上的家》能获得如此好评是因为角田光代在作品中揭露了深刻现实——女性生育和自我价值之间的巨大割裂，这样的割裂几乎横亘在所有女性的生命中。无论我们是不是主妇，我们都是女性，生育和女性紧紧地挂钩在一起，以至于社会环境默认女性都会结婚生子。

每个女性的生命中都存在必须面对的一种可能：我究竟会不会成为那个站在坡道上的女人？我必须为了家庭牺牲我本能得到的一切吗？

有一句话流传很广，叫做“女子本弱，为母则刚”，似乎平时再普通不过的女人，一旦结婚生子成为母亲，就会变得无所不能。这是一句赞赏母亲的话语，同样也是男权社会套在母亲身上的枷锁。社会将母亲们推上神坛，而当母亲们无法做到“为母则刚”时，就会被群起而攻之。书中的里沙子和水穗就是如此，她们放弃工作失去社交，可谓付出了一切来养育孩子，一旦孩子不听话或是表现得不如别的孩子，被指责的仍旧是她们。被绑架的母亲们心有困惑也得不到解决，周围人只会用“母性本能”来敷衍了事。

书中并未描写激烈的言语碰撞，没有彼此激烈的对骂，矛盾的爆发都悄然无声，言语暴力被看似柔软温和的为她着想的言语包裹起来，恶意变得难以察觉，更毋庸说反抗了，更可怕的是这样的恶意成为常态，就连主妇自己也放弃思考和决定，默许被这样对待，默认自己不如别人，最终失去一切的她们只能沉默，成为无法开口辩解的提线木偶。

角田光代曾说自己的写作动力与创意来源于愤怒，来自不平则鸣。在她的笔下，困惑于母性本能，挣扎于维系育儿与工作平衡，试图寻找自我的女性形象不胜枚举。《第八日的蝉》中，偷走情人的婴孩，却倾注母爱将之抚育四年的野野宫希和子，被捕时说的最后一句话是“那孩子还没吃早餐呢”，尽管不是自己亲生的孩子，希和子依然是个母亲。《对岸的她》中，离职五年重返职场的主妇小夜子，奔波于公司、保育园和家之间，羡慕着自由洒脱的职业女性友人。以及《坡道上的家》中，互为倒影的里沙子和水穗，只需要投下一颗石子，荡起的涟漪便可使二人的界限崩塌。这些母亲怀有各自的爱和绝望，而社会却对此置若罔闻，直至悲剧发生。

我想角田光代所描写的故事更像是一种警醒，对于社会不公的警醒，她寻找那些潜藏在社会共识中对女性的恶意，将赤裸的真实展现给读者。在此之前，那些恶意就是房间里的大象，它存在，我们却视而不见。

女生不如男生，女生不适合学理科，女生应该在家带孩子，女生没有逻辑思维，女生就是不讲道理。这些刻板印象伴随着女性成长的每一个阶段，在反复的自我怀疑中，女性终于被环境塑造成刻板的女性。

值得注意的是，近年来女性权益运动蓬勃发展，Me Too运动和姐姐来了等话题获得大量女性支持，随着妇女意识逐渐觉醒，描写女性的作品有了更多的关注，除文中主要讲述的书籍外，《82年生的金智英》《黑匣子》《房思琪的初恋乐园》和《使女的故事》等书都曾引起过女性群体的广泛共鸣。女性作家同读者们一起，致力于改变刻板印象，反对压迫与性别歧视，鼓励彼此实现自我价值。

在《坡道上的家》改编电视剧中，审判长宣布判决时说了这样一席话：“因初次育儿常感到困惑，又被周围的人无心的言行所影响，更丧失了自信，没有人来帮助自己，也无法求助，这也是无法否认的事实。被告人的罪行是由被告人独自犯下的，但究其根本，和本次案件有关系的包括被告人丈夫和婆婆在内的家庭成员等所有人的各种情况混合在一起，最终对被告人所造成的巨大心理压力才是根本原因。”

水穗的悲剧已然发生，究其根本却是社会的悲剧，如何避免这样的悲剧在里沙子身上重演，是每一个人都值得为之深思和努力的，因为我们都有成为里沙子和水穗的可能性。而我由衷期盼世上每一位女性，都是她自己。

阅读文献：角田光代《坡道上的家》

参考文献：角田光代《对岸的她》

角田光代《第八日的蝉》

电视剧《坡道上的家》

人生易逝，且听风吟

北京化工大学
材料科学与工程学院2年
余章璜

一切都将一去杳然，任何人都无法将其捕获。我们便是这样活着。

— 题记

谈到日本文学，村上春树是无法绕开的一个名字。无论我对东野圭吾、川端康成多么

喜欢，都不能对村上春树熟视无睹，因为他的作品早已漂洋过海，像蒲公英一样在广阔的世界里生根发芽。很早之前，我就对村上老师的大名有所耳闻，但是横亘在我们之间的，是传统观念的大山（自己觉得读不懂文学大家的书），所以我与村上老师的故事开始得很晚，晚到那年的生日，朋友无意间送了我一本书，一睹之下才恍然发觉。

这本小说是村上老师作家生涯的开始，也是我们相识的开始。小说的内容很简单，一个男孩跟一个女孩在夏天相识。小说的语言很直白，情节也很简单，没有转折、没有起伏。语调淡淡的，但是却给人一种涩涩的感觉，它似乎在表达着什么，就像每个人的青春里都曾有过矛盾，不想为人所知的，但又渴望被人了解的东西。第一次翻开这本书，是高一那年。懵懵懂懂的我，渴望爱与被爱，像书中的那个男孩一样，明明想要靠近喜欢的女孩却唯唯诺诺，直到逐渐失去，才恍然大悟。当时只能体会到那种爱而不能的忧伤，心如绞痛的无处抒发。正如村上老师写道：“等到夏天回去，我便经常走那条同她一起走过的路，坐在仓库石阶上一个人眼望大海。想哭的时候却偏偏出不来眼泪，每每如此。”

第二次翻开这本书，是高三那年。高考失利的我，承受着生活所给予的苦痛，浑浑噩噩之下，我又打开了它，那个时候不再是忧伤，而是一种悔恨，就像书中的男孩失去了他最重要的姑娘，我也失去了人生中最重要转机，但是，我开始学会去安慰自己，也渐渐明白了错过的东西就再也找不回来了，即使费尽周折去寻找，但仍然是徒劳，这高考失利的遗憾，也许就永远存在了。正如书中那一句“然而，这一切宛如挪动过的复写纸，无不同原有位置有着少许然而确实无可挽回的差异。”

第三次翻开这本书，是去年。整理高中书籍的时候，我偶然间在书橱的角落发现了它，抚摸着一页页熟悉的纸张，渐渐将身心沉浸其中。读过一章又一章，我开始感慨自己从前的纯真，开始感叹自己失败时的自怨自艾，我也时常会想村上老师在创作的时候，会不会也对自己的曾经有所感触呢？

“而今识尽愁滋味，欲说还休，欲说还休，却道天凉好个秋。”人生回首，不过如此。还记得将远行那天，我放下俗事，伫立在清凉的门前，端一杯清茶，轻轻摇晃杯中透出的过往时光，将心归零，割舍纠结于心的如烟往事，俱忘却一切烦恼，敞开心扉的大门，最后一次去品味这本书中的故事，恍惚之间，我看到了那个鼓起勇气告白的少年；看到了那个含着泪水，直面失败的少年；看到了那个一边嗤笑过往却又不经意间哽咽的少年。夜深人静的时候，朋友打来电话，惊醒了沉醉在书中的我，絮絮叨叨之间，朋友问到了我现在的状况，现在的感受，我想很清楚的告诉他四个字：人生易逝。可是，他岂能通过想象来拼凑我的心碎？但我知道，这个悠长的夜根本不会将路过的风景变换，再也不骚动的笔尖上，也只能重复着昨天的故事，而那只能在朋友的问询的空间，蘸着孤寂的心情，写下一份迷离的回忆。站在灯红酒绿的城市中间，被生活抹去棱角的我，不复青春的热血与锐气，开始去渴望这种安逸的生活——愿有一庐，驱寒避暑。内有猫犬，绕膝入怀。琐事繁星，安有通途。冬日饮酒，雨夜安眠。

席慕容曾说：“青春是一本太仓促的书。”逝去的青春，是一段迷茫、固执、挥霍的

岁月，轻盈散淡却又扣击心扉。直到今天，我还是只能品味出这本书中最浅显的道理，没法真正体会到村上老师所想要表达的东西，但是书里的情节确实像是一面镜子，模模糊糊的映出了我自己的影子。

最后，我想用书中最喜欢的一句话来结束，“如果有人问：幸福吗？我只能回答：或许。因为所谓理想到头来就是这么回事。”人生易逝，愿君一品《且听风吟》。

二律背反—《菊与刀》^{iv}后对日本的感性体会

中国傳媒大学
電視学院2年
章雨果

初看日本，这是一个摩登而素净的国度—东京塔上，便可远眺富士山的明净；天空树旁，便可望见隅田川的澄澈。神社旁，新干线飞驰而过；鸟居外，航空港熙熙攘攘。自然与人文在这里交汇，古朴与新潮在这里碰撞，静谧与喧哗在这里重合。“万物并育而不相害，道并行而不相悖”，无论是东京的车水马龙亦或是北海道的层林叠翠，日本列岛和谐地包容着万物，让他们交相辉映，互不相侵。

再看日本，是基于美国文化人类学家鲁思·本尼迪克特所著《菊与刀》一书的。鲁思笔下的日本，抛却了日本现代飞速发展的物质成果，而从精神上探究日本人与大和民族的秉性。阅读本书后，方才发现本人对日本的第一印象，只是日本波光粼粼的海面上的冰山一角。众多更深层、更隐含的元素，还有待探索、发现与验证。读毕此书，方才发现，复杂、矛盾甚至相悖，早已渗透进日本文化的方方面面。

日本人爱美而黷武。“山谷明月光，流萤皆彷徨”^v，“物哀”之美，自江户时代便随风潜入夜，从文学潜入文化，成为日本文化不可或缺古老元素。长谷川等伯用寥寥几笔勾勒出两三棵松树旋即收笔，却用留白描绘出松林之深远幽寂^{vi}。“幽玄”之美，百年前便已化作浮世绘与水墨画中的“留白”，默默熏陶与塑造着日本人的独特美学文化。大和民族身体力行、代代相传，让“爱美”成为国之主流。然而，无论是古代的数次“合战”亦或是近现代的多次侵略战争中，日本人在爱美的同时，却仍还在摧毁着美。毁灭与屠杀中双手沾满鲜血的日本军人，依然能悠然享受茶道花道的美好；自己心中的美被破坏了，便要以死殉葬。如秋叶之静美，增添最后一丝美好。爱美，却毁灭美。黷武，却崇尚“和”。

日本人尚礼而好斗。每逢传统节日，神鸦社鼓、流光溢彩是日本街头的常态，对传统节日的尊重与传承印证了其拳拳尚礼之心。谦辞与敬辞纷繁复杂，晦涩难懂，却需根据不同的人灵活应用，即便是日本首相，也会对下榻酒店的清洁工写下一封真诚的感谢信。学不会察言观色、不知礼节，便难以在日本社会立足。然而，武士道精神支配下的他们，却会以最野蛮的方式解决矛盾——不是你死，就是我亡。狭路相逢，血溅五步。对于他人生命无情地剥夺，却在这个尚礼的社会中，被默认为不是“无礼的”。决斗甚至是蓄意谋杀，都可超越法理被他们所原谅甚至尊敬。对生命的漠视让他们的尚礼精神缺少了主心骨，变得畸形而矛盾。

日本人喜新而顽固。他们欢天喜地地接受着大化改新、明治维新、战后重建所带来的翻天覆地的变化，却难以更改许多早已过时的繁文缛节：早已完成资产阶级革命，却固执地保留下天皇；早已进入热武器时代，却执拗地在各大战场用刀；曾有着最先进的巨舰大炮，却缺乏最基本的损管与救援设备……因此，他们会使用最先进的战机，采取最古老的战术——撞击，组成二战中臭名昭著的“神风敢死队”，以此来捍卫他们的喜新与顽固。

日本人服从而不驯。他们会服从最严苛的命令，也矛盾地违背着最基本的准则。他们愿意服从上级的一切指令，即便是切腹自尽；但以下克上却总是成为常态：战国时，家臣推翻大名，大名推翻幕府；二战时，下级军官屡屡刺杀高级官员。纪律严明的他们，却同时自由散漫，二者本来无法并存，却戏剧般地共同表现在日本文化之中。

爱美，却又黷武；尚礼，却又好斗；喜新，却又顽固；服从，却又不驯。“并行却相悖，并育却相害”成为了日本文化的现实。所有的这些元素抵触、矛盾、冲突，却畸形地聚在一起。让当代日本和谐而暴力、谦逊而积极、摩登而古朴、拘束且自由。一切，在二律背反中蓬勃萌芽，一切，又在二律背反中畸形生长。《菊与刀》一书中的日本，让人费解，却让人心驰神往；让人赞叹，却让人黯然神伤。一切都并行并育，成就了在二律背反下依然茁壮成长的现代日本。

佛法王法俱灭：比叡山的织田信长^{vii}

四川轻化工大学
外语学院 2 年
孔劲闾

最开始知道织田信长这个名字，是某款游戏中有些中二的“第六欲天魔王”，当时还觉得好笑——似乎战国时代的日本人都喜欢给自己起一些奇怪的名字。可是后来认真研究过后才知

道，这嚣张的名头后面是什么——是火烧比叡山；是一向宗的覆灭；是神权政治的衰亡；是织田信长的政治抱负——是人主的国家，而不是神主的国家。传教士路易斯·弗洛伊斯说“信长聚集全国的神像与佛像，他的目的并不是要崇拜这些偶像，而是要这些神佛崇拜他。他认为自己就是神，在他上面没有创造万物的神。”武田信玄给织田寄了封署名为天台座主沙门-信玄的信，他便回敬一封署名为第六天魔王-信长的信。他用佛教中魔王的自称告诉其他人——我就是神。

他是嚣张的，也是理智的。

794年平安京成立后，佛家势力空前强大，甚至到了天皇的死与继位都要通过和尚之手实施密教仪礼。中世日本的摄关政治和院政体制正是产生于这样的神权之下。十世纪中叶，武装僧兵出现。战国时期，公家，武家，僧家三大势力并立。甚至有如本愿寺般成为实际上的大名的例子出现。

宗教的力量不该与政治结合，一个国家的根基，更不该是神学——织田信长这样想到。他已经走在了那个时代的最前面了，我们站在上帝视角，轻而易举的就可以举出一连串罗马教会的黑暗时代的例子，但织田信长在那样一个时代，宗教是民众的普遍信仰，是割据一方的经济政治实体，他面对的不仅仅是那些僧侣，还有所有站在僧侣背后的人。他对害怕天罚的明智光秀说“光秀你难道还不明白，那些佛像只是金属和木头而已”，他面对的，不是天罚，而是背后的人心。比叡山的大火烧光了那些金属和木头，一向宗覆灭，武田信玄说此举是佛法王法俱灭，至今日本仍有许多史学家称他罪大恶极。

他将自己放在天下人的对立面。

可他还是做了，并且义无反顾。织田信长当时的目标是天下布武，一统日本。花费如此大的精力去对付宗教势力实属有些吃力不讨好，对付分散的大名显然比对付至上而下纵横全国的宗教势力要简单许多，更何况当时的大名大多信仰佛教。而将神权从政治中分离得到益处也不是一时半会可以显现出来的。他不仅仅是为了当下的日本，更是为了后世的日本。他没有与虎谋皮，联结寺庙势力不断吞并扩大，他的眼光，一开始就放在了后世。

在他之后，丰臣秀吉，德川家康继承了他的道路。日本长期的宗教战争被终结，信仰被整合，且不再干预国家机器的运转和普罗大众的生活。

或许多年前皈依法华宗的织田信长不会知道，不久的将来，他成为了剑指比叡山的第六天魔王。而本能寺的大火中，织田信长叹息着世事无常，也不会知道，多年之后，他用血与火的代价铺就的道路，将日本从桎梏中拯救了出来。

他这一生，从尾张国的大傻瓜，到织田家的家督，到美浓国的国主，桶狭间战役，稻叶山城合战，比叡山大火，京都阅兵，天下布武……再到本能寺的大火。从织田庶家不受宠的长子，到天下布武的第六天魔王，起落浮沉，波澜壮阔。我常常觉得，是不是他再多活久一点，天下布武真的可以实现。他总让我想起曹孟德，想起叶卡捷琳娜大帝，或许这些人活得更久一点，又是另一番天地。或许慧极必伤是真的，人生无常也是真的。

周作人所翻译的《平家物语》中，有这样一段诗——“人生五十年，如梦亦如幻，有生亦有死，壮士复何憾。”——来自于日本传统戏剧幸若舞中的名篇《敦盛》。这首和歌本是熊谷直实为平敦盛做的殉死舞。一之谷合战时，平敦盛为敌将熊谷直实所杀，从儿时好友到拔刀相向，熊

谷直实感慨世事无常，故作此歌。但大多数人了解此歌，是因为传闻中织田信长在桶狭间之战前夜与本能寺之变前都曾咏唱过。或许真是一语成谶，他笑着世事无常，送走了今川义元，他叹着世事无常，在熊熊大火中，结束了自己的一生。

但传闻永远是传闻，我们或许永远都无法知道，那一夜天守阁的大火中，他想了什么，说了什么。但唯一确定的是，他的一生真如歌中所唱。

人生五十年，与天相比，不过渺小一物。

看世事，梦幻似水。

任人生一度，入灭随即当前。

此即为菩提之种，懊恼之情，满怀于心胸。

……

放眼天下，海天之内，岂有不灭者。

一度生を享け、灭せぬもののあるべきか。

一度享此浮生者，岂得长生不灭。

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(中国語版)

二等賞作品

(中国語原文)

写给我心里藏着的那个小孩

上海交通大学

材料科学与工程学院3年

彭宏宇

在诗集的封面上有这样一行字“写给你心里藏着的那个小孩”，我有些忧伤、惊喜又有些轻松地看它，它好像看穿了我，我的目光停留在这句话上，久久不愿离去。我想我已经决定要用诗的眼睛来找寻她。

相遇

“向着明亮那方，哪怕一片叶子，也要向着阳光洒下的方向。”这首诗是我与金子美铃的第一次相遇。我问叶子、我问飞虫、我问住在都市里的人们啊，为什么呢？为什么对光明如此炽热的追求？哪怕一片叶子、哪怕烧焦了翅膀、哪怕只是分寸的宽敞，都要向着明亮那方。没有答案，但“向着明亮那方”不断地呼唤，让我听见美玲的低语“即便人生艰难，也要看到世界的美，保持温柔的心，向着明亮那方，一路远航”。

美玲这个姑娘就像向日葵一样，种在阳光下，它撒下阴影，是寂寞的味道。我想象她趴在窗户上，呆呆地望着远方，她好寂寞啊，她的寂寞可以随处安放，因为她的寂寞里有大海、星星、冰雪、麻雀、芥子木偶、蚕宝宝、扑克牌女王、歌留多……她的寂寞创造着一个又一个的世界。她想要搜集全日本散落的花瓣，撒向大海，好让她在美不胜收的花海中驶向遥远的他方，去到那能将世界一览无余的地方。“如果我是男孩，我，真的想去”，可她不是男孩。我只看见在沙滩上孤零零地坐着一个女孩，对着遥远的海上的那艘船儿说“请你一直在海天之间，向着远方，一路远航。”

在金子美铃留下的512首诗中，有快乐、期待和希望，那么温暖、明亮；也有忧伤、哭泣和悲痛，那么让人心疼。我不知道为什么我会感到缺失，但她的诗歌就是这样抚慰着我。读诗的时候，指尖的雪会融化，因为脑海中“快乐”的鱼儿游来游去，我的心田上也开了一朵叫“温暖”的花。我看见有一个可爱的小女孩在向我招手，对着我笑。她向我走进，想要拥抱我，她要为我讲一讲她的故事。她的小调皮把我逗得直笑，跟着她愉快的脚步哼起歌谣；她小脑袋瓜

子的奇思妙想也震撼着我，“好棒”；她的小寂寞、悲伤也让我感到难过，我拿起手绢想帮她擦眼泪。无论快乐也好悲伤也好，她那感知万事万物的柔软细腻的内心和那永远存在于我想象中的笑脸早已温暖、治愈了我。

回味

很难想象，构建了这样一个丰盈、细腻温柔的世界的诗人，她的一生其实充满了艰难和悲伤。“一个渴望父母关爱，却无法得到满足的小女孩；一个不被看见的幼小心灵；一个无法给予孩子情绪抚慰的母亲；一个寂寞失落的只能通过外界幻想来获得喜悦和安慰的小小身影”，可她的内心却还是充满着爱，给自己，也给万事万物的爱，至始至终她都保留着自己的那颗赤子之心。

诗歌没有年龄，只有孩子是时间的上帝，在诗歌里我也可以做回孩子，沉醉在甜甜的酒里。我本以为这酒不会醉人，但多少个夜里，我闭上眼睛，有些词、有些话就一个劲儿地往外蹦，它们争抢着逃离我的大脑，可是我的脑袋已经很疼了，我想安静，不想它们吵闹，可它们还是想要逃离这副躯壳，为了成全它们，我拿出了白纸，用笔将它们安顿。

不知道是从什么时候开始，我喜欢上了诗歌，喜欢上了一个个字之间随意碰撞出的火花，那无与伦比的想象力带给我的震撼和惊喜。或许是从谷川俊太郎《二十亿光年的孤独》《三万年前的星空》……我开始觉得自己也把“活着喜欢过了”。我太爱诗的美丽，它带给我太多的感动，为一个名词搭配上了另一个不属于它的名词或者动词，我常常热泪盈眶，它简洁、留白，然后是平静和满足。每一次我记录下看到的那些奇思妙想，就像发现了一个宝藏，我如饥似渴，想要把它们打包、另存在我的大脑。这一首首歌谣，是时间美人之歌，将我们从青年、老年带回到童年，好像完成了一次生命精神上的循环。

重逢

合上书，我结束的是一段对话，也是一段旅程。我想起辛波斯卡的这句话“她开始自遗忘的镜子，打捞那些早已沉没的脸。”语言文字是如此的相通，我回想着，脑海里浮现出那一缕一丝的文化共鸣。每每读完金子美铃的诗，我就和着她的诗写作，小时候的调皮、欢乐和那些许忧愁一一在我的笔尖闪现，我看到了曾经的自己，我看到她还保留着一份纯真，天真烂漫地好奇着这个世界的一切，一切的语言都那么自然，好像她从未离去。我知道她的脆弱和柔软，但因为她的存在，我的生命更加丰盈，我有好多的无边无际的想象想在白纸上落地生根。我想好好保护她，像金子美铃那样，不放弃热爱这个世界，即使有一天我不再能看到鱼儿的眼泪、听到花儿的哭泣……我打捞起了曾经的自己。

是否，我们的心里都住着一个人，她拥有我们童年的全部记忆，她始终会把红太阳当成咸蛋黄，而我们早已知道月亮不会发光；她会问为什么“从乌云里落下的雨，却闪着银色的光”，而我们却说“那有什么好奇怪的”。我们看不见她，但她就在那里，从未离去。

它看穿了我，我内心的一片天地。

我看到了她，住在我心里的孩子。

阅读书籍：金子美铃童谣诗集两册《向着明亮那方》《秋天，一夜之间》

读《解忧杂货店》有感

鞍山师范学院

外国语学院日语学部2年

宋科淇

每个人都要经历站在分岔路，回顾昨日的嶙峋和眺望远方的茫然交错若失的模样。人生是一场艰难的旅途，过程痛苦而煎熬，如何抉择与救赎。《解忧杂货店》中东野先生会给你带来答案。

在四年前的，一个慵懒的午后。伴着点点蝉声与钟鸣，东野圭吾的文字像一架急驰的列车，倏忽地撞入了我的脑海。是什么时候呢，童话的面具被撕裂，愈发成长，愈能发觉这世间残忍的真实。东野圭吾则通过《解忧杂货店》深沉且温柔的笔触唤醒了人心隐藏的善良。

翔太、敦也、幸平，三个人对这个世界充满了愤怒和抵触的情绪，这是多么熟悉的情感啊。我从他们每一个身上都能看见自己曾经的影子，因为这三个人就是曾经误入歧路但仍心存善念的我们呐。有时候并不是我们希望坠入黑暗，只是在地狱的边缘没有天使伸出翅膀。无论是纠结梦想与陪伴即将过世男朋友之间的月兔，到不知道是否放弃音乐而继承鱼店的鱼店音乐人；从到纠结于是否生下没有父亲的孩子的绿河，到是否跟父母一起连夜潜逃的保罗。都贯穿着救赎心灵的理念。事实经验告诉我们，救赎是相互的，无论是救赎和被救赎，人类情感中最美好最绚丽的花朵，在东野先生的笔下呈现，这大概就是人类与动物之间的区别吧。

“这么多年咨询信看下来，让我逐渐明白一件事。很多时候，咨询的人心里已经有了答案，来咨询只是想确认自己的决定是对的。所以有些人读过回信后，会再次写信过来，大概就是因为回答的内容和他的想法不一样。”每一代人都会有自己的迷惘，这是原文中我最喜欢的一段话。

考虑的在纠结的事情，其实心中早有选择，只是需要有人来认同才会更加坚定地去做。或者是即使是别人不认同，事情的方向也会是向自己想要的方向发展。

很有意思的是我们不能凭自己的主观去断定对方是怎么样的人，就像那些咨询者，在没有完全说出实情的时候，我们无法想象他们到底是怎样的人，也没法去揣测当事人的处境更加无法去想象当事人在未来会有怎样的发展。就像三个青年劝阻月兔放弃运动会反而使她坚定了信念，这些是当时无法预料到的。亦或是绿河女儿对绿河的死的揣测，以为是妈妈故意想带着女儿一起自杀一样，其实事实是截然相反的，这些矛盾构成了一种对立的美感，割裂且统

一。

“虽然至今为止的道路绝非一片坦途，但想到正因为活着才有机会感受到痛楚，我就成功克服了种种困难。”

选择可以改变一个人的人生，但是即使是做了错误的选择又将如何呢？只要是在未来的日子里找到自己的本心，寒冬肆虐的时候也会有暖流喷涌而出。

天空飘着雪花，是晶莹六角形，珍贵的善意在冬季里愈发迷人。在春天到来之前，我们相互依偎，步伐坚定的走下来，迎接旭日的光辉。只要心中有爱，便能面朝大海，春暖花开。

从绿河和保罗的身上感受到，其实我们往往只发现了事情最浅显的一部分，原来这个世界最深沉的爱从不需要用言语来表达，我想起了我的父母。

他们仿佛一条分离的线条，只短暂的相触后便从彼此的世界中平行，永不相交。我开始变得敏感，自卑又脆弱，如同蜗牛坚硬的铠甲般，将柔软抵在心底，锋利对准它人。

我一度叛逆，空啤酒瓶，微醺，香烟，伤痕，嘈杂晃动的镜头，窗外的宿舍，真实撕裂的空旷，纯粹而清晰地嘶吼。没人爱我，连我自己都不爱，直到我遇到了温暖的解忧杂货店。

我曾经如此地恨我的父亲，恨他的自私，恨他的软弱，恨他的暴虐。我们在彼此对抗中，忽略了浓厚到甚至坚硬的情感，哪怕就算是恨，也抽象成一种空乏的感情。读到保罗在若干年后察觉父母用生命给予他的保护时，我的眼泪同保罗一样喷涌而出，溅湿了整个纸张。

恍然间我发觉，我的父亲身影不再雄伟，变得有些佝偻；健壮的双手不再有力，赤膊的双臂上已布满青筋；固执的白发似有了生命一般，刺进了我偏颇的瞳孔，刺的眼发酸。成长和宽恕，就在一瞬之间。

我渐渐地理解了许多东西，在书本之外。剥下那层僵固的外壳，红肿的肩头、细碎的嘱托、睡熟后轻轻捻起的被角，似乱麻般从零碎的记忆片段中翻涌出来。与之同时降临的，一股极力抵抗又熟纳陌生的血脉将我与父亲紧紧联接。

读一个人的文字，要从它的情感中抽离出一种力量。

喜欢《解忧杂货店》的理由在于盘根错节的故事里，都有你自己的影子。你可以进入这个光怪陆离的世界，跟从东野圭吾，寻找在最美好也最荒谬的时代流失的人与人之间单纯的善意与真诚。

川端康成：清醒但孤独的徒劳

西南石油大学
石油与天然气学院2年
吉義天宇

零

1972年，4月16日，樱花盛开的时节。

川端康成独自一人来到玛丽娜公寓。

他在地面上铺好一张被子，枕旁搁好威士忌和酒杯，然后细细品尝了这瓶美酒。

最后安静地躺在盥洗室，嘴里含着一支软管。

软管连接着外面的煤气罐。

一、“凌晨四点，海棠花未眠”

其实最初知晓川端康成死因为自杀时，我只觉着困惑。只因那时我对他的了解仍停留在《花未眠》中，仍觉得先生是那位在凌晨四点醒来，写下“如果说一朵花很美，那么我就要活下去”viii的温柔词客。

归根结底，《花未眠》为我描绘出的川端康成是一个疲惫但温柔、孤独但清醒地生活着的旅人，所以我未曾想过他会选择自杀。

大概正是因为现实中川端康成最终放弃生命的选择与曾经在文中写下“那么我就要活下去”的强烈反差，让我开始有了想要进一步了解他的过去的想法。我才突然想起了凌晨四点失眠的痛苦，才终于察觉到那一句“凌晨四点醒来，发现海棠花未眠”背后潜藏的失眠的孤独与无助，才最后注意到文章结尾时ix还隐藏着这样的焦虑与不安。

于是我才终于明白，原来《花未眠》带来的不只是那朵文学史上永盛的海棠，也是那位孤独但清醒的词客向我们不断展露的凌晨四点的悠长寂寞与缱绻思绪……

“完全是一种徒劳嘛”

前几天与学医的友人玩笑时才得知，煤气自杀其实是最美的一种自杀方式——因为体内由于缺氧而形成的碳氧血红蛋白会使面部和口唇呈现绝美的樱桃红色，好比特意修饰过的遗容——刻意，但也充满美感与仪式感。

把这分享给另一位正在拜读《雪国》的友人，她反问我：“如果这样，那从川端康成一贯秉持的‘徒劳’来看，这样唯美但刻意的自杀不才是他一直重复说的一种徒劳么？毕竟人都没了，这按照中国俗语说来就好比‘斯人已逝，生者如斯’，那这完全是没必要的嘛。”说着，她还模仿岛村来了一句“完全是一种徒劳嘛”。

听完我直觉哪里不对，但一时也并不能列出三五条来直接反驳，于是下来开始仔细思索这个问题。

关于先生选择自杀这个问题，从旁观者的角度来看，这大约是他有意做下的选择。

就所谓“殡仪馆先生”x的悲戚生活而言，这样就此逝去也许是并不令人意外的结果；从他作为文人特有的浪漫入手，选择这样充满仪式感的形式自我了结，而非听天由命地等待死亡的收割也并不难理解；且未找到遗书的现场大约是对他曾写下的“自杀而无遗书，是最好不过的了”xi的最好印证了。

那么难点落在选择煤气自杀这个方式，唯美与刻意并列。

唯美——川端康成的一生都是在追求美的一凌晨四点未眠的花，遥远雪国暮色之镜，唯美清灵的伊豆岛……对于追求了一生的美的他来说，所有美的东西却都离不开关于悲的味道，美如樱花脆弱灿烂却短暂可悲，悲如空谷广阔寂寞却静谧幽美。所以为这最后的死亡的悲戚点缀上极致的美感，我觉得便不会是徒劳无功的，也不会被归于“徒劳”之列。

刻意——人们会觉得川端康成刻意营造的自尽与他主张的“徒劳”背道而驰，这样的情绪大约是源于他曾写到的那一句“生存本就是一种徒劳”。人们由此觉得他并不看重生命，觉得他这样隆重死去，就他按理应该“轻视”的生命而言，压根是徒劳、是多此一举。但事实上，结合川端康成在《临终的眼》中对于芥川龙之介与太宰治等人的自杀行为的评判，以及那一句“我觉得人对死比对生要更了解才能活下去”^{xii}，我觉得，川端康成和其他的日本文人有着一脉相承的生死观——并不是看轻生命，而是看重且严肃对待死亡而已。而这正并不与所谓“生存本就是一种徒劳”相违背。

而这些仪式感的形式也许正是日本文人对于自《源氏物语》便盛行的“物哀”之美、“灭亡的美”生死观的最好践行——芥川龙之介枕着圣经服下了安眠药，有岛武郎和情人在轻井泽的别墅中殉情，太宰治殒命在了玉川上水，三岛由纪夫以最为传统的武士道手段剖了腹，川端康成则静静地含着煤气管离去，一个字也没留下……

所以归根结底，这一场唯美而刻意的仪式不该是一种徒劳，也不必有岛村之流来唾上一句“完全是一种徒劳嘛”之类的话。

只因为每一个时代，我们总能看到一些人以一种新奇的方式谢幕。

或是江湖侠客隐遁山林，或是文人墨客退居私宅。

但“生如樱花，灿烂而亡”，于川端康成而言，或许就是那个最适合的退场方式。

零

川端康成，1968年诺贝尔文学奖获得者，却自尽于获奖后的第4个年头。

些许是他在颁奖礼上演说的词的印证^{xiii}，于是这颗清醒但孤独的心停止在了4年后那个樱花盛放的早晨，没有留下一句话。

我这般后来人看着，便只觉着那个时代、那个清早，从四点的凌晨里迎面走出个清醒但孤独的灵魂，看着人间之景也不说些什么，只轻轻叹上一句“徒劳”，便趁樱花不注意，搭上雪国的列车离去了……

日本是朵烟花

北京化工大学

文法学院2年

王驊塵

在很长一段时间里，我是不敢读日本作家的作品的。我对于“死”这件事是很害怕的，我们敬畏死亡，我们常常避之不谈。而日本不同，日本作家、日本人、乃至整个日本都对命运、生命和谋杀都有着独特的见解。他们的生死观是世界独一份的。

这种见解来自他们脚下的那片土地。日本是一个灾难多发的国家，地震、火山、海啸等，四面被海围住的感觉也许是我们很难感同身受的。环境是不能选择的，自然规律是难以逃脱的，多灾多难的日本人在不可超越的环境里一点点淬炼出独特的、异于其他文明的生死观。他们对死亡有一种诗意的淡化，有异于其他民族、其他文明的冷静与泰然。灾难总是无穷无尽地在身边萦绕，与其被动接受不如主动选择，主动迎接有尊严的死亡方式。所以我们可以看到日本的军官和士兵在走投无路时会选择剖腹自尽，慷慨赴死，这是他们对死亡的迎接。

死是对生的不稳定状态的一种解脱，这种不稳定状态不单单指的是可能比明天更先一步到来的自然灾害，更指他们无奈或无法融入群体时的状态，日本人在表达上往往“吝于”“羞于”“短于”“弱于”，这不得不提到他们的“耻感文化”。他们害怕给别人带来麻烦，于是更多地选择了“麻烦”自己，我曾听说过一个事例，是在日本新干线上的一位姑娘因为身体原因呕吐，不想打扰到车上其他乘客，便一直把呕吐物装在自己袖子内直到下车。或许也正是因为这种耻感文化，使得日本人“冲破”了死亡禁忌，如何迎接死亡成为一门新的学问。此前在日本曾流行过“终活”，以老年人为主的群体积极参与其中，他们学习如何迎接死亡，如何谢幕人生。日本还推出了“终活”旅游团：处理财产、撰写遗嘱、拍遗照、甚至躺入棺材内，亲身体验入棺的心境。越来越多的人关注死亡，渴望有尊严地死去，也由此催生了“临终关怀”和“安宁守护”，他们的理念是对生命的尊重与珍惜，让人生的最后阶段过得安宁、平静、有尊严，让每一个生命在临终时都能有尊严地离开，完成对人生的谢幕。直面衰老与死亡，是对死亡的敬畏。

这种对死亡的独特的领悟和解读，渗透在日本文化方方面面。日本的小说、影视作品等都传递出那种悲剧感、宿命感、使命感和民族风格鲜明的死亡美学。日本有太多著名的作品实则都是一种“死亡欢呼”，他们慢慢讲述死亡，他们细细描摹死亡，他们反复咀嚼死亡，对死亡却是无所谓的态度：“死并非生的对立面，而作为生的一部分永存。”“我希望他从小就明白生和死是同样的尊贵，死是每个人都不可逃避的。”他们不畏惧死亡，也从不避谈死亡。甚至在受众年龄较小的动画与动漫中，死亡都是“常客”，如《名侦探柯南》，日本的侦探小说不仅仅是推理与破案，更糅杂着一个个小人物在里面，他们描摹出了社会人生百态。

这种对死亡的独特的领悟和解读，渗透在日本街头角角落落。樱花是日本国土必不可少的元素，日本人像樱花，樱花也像日本人。他们投入时身心俱疲，认真起来一板一眼，乃至灿烂时的热情奔放，飘逝时的极致坦然，都是樱花开落模样一瞬间灿烂，刹那芳华。从绽放到飘散

的推移，让人感受到美好事物的短暂和不可复得，更令我难忘的是在那瞬间，他们活得肆意、痛快、尽兴。

这种生死观有一种刹那感。

我看过日本的电视剧和动漫、里面有走起来“哒哒”响的木制房屋。与创造出坚不可摧的石结构城堡、寺院、都市的民族不同，在易朽的木结构房屋中居住的民族，有某种以断念、达观为美的意识。木头易朽，文明更迭。他们追求的从不是“永垂千古”，他们希冀的无非是那片刻的荣光，即便死亡，也在所不辞。

日本的烟火大会非常著名，他们本身又何尝不像烟花一样呢？烟花登顶那一刻绽开在夜空中却又很快消逝，他们知道一生短暂，他们知道死亡可能就在明天，他们选择了义无反顾，把人生活得恣意洒脱又痛快。

日本是朵烟花，我在隔岸看。

他们敬畏死亡，我敬畏他们。

所阅书目：《樱花残：灾难视角下的日本文化》

家：一条无法逾越的鸿沟—论《人间失格》的现世思考

大連外国語大学

日本語学院修士2年

王燕

《人间失格》是一部半自传体小说，大部分故事情节与作者太宰治有迹可循的人生轨迹相吻合。大庭叶藏是太宰治的化身，

他借主人公之名诉说内心苦闷与无奈、不安与彷徨，细致地描绘了一个被社会“边缘化”人物的内心独白。回首太宰治的过往，一生自杀四次未果，对于其自杀的原因相信是诸多不幸共同导致的结果，但无论是大庭叶藏还是太宰治，家庭因素绝对是引领他们走向毁灭的一个重大原因。

家都是我们的母体，终其一生都会受到原生家庭的影响。

原生家庭的“阶级”之痛

每个人都带有原生家庭的心理烙印开始自己的成长经历。长大之后，那些摆脱不了原生家庭影响的人始终找不到与自己、同社会和解的方式。

大庭叶藏出生在大地主家庭，父亲从政且是大资本家，家里的吃穿用度都十分讲究。但是

从小衣食无忧的生活并没有给他丝毫的幸福感。旧时代的大地主家庭承袭的是家父长制，排行靠后的他就像一个多余人，游走在亲人与佣人之间。

“我还是搞不懂，越想越迷糊，这令我感到惶惑不安，仿佛这儿世界上只有我一个异类。”古板的父亲、严肃的家庭氛围、家人的疏离使他更加胆怯、无助。在家这所牢笼里，他无法展现最真实的自我，隐藏自己、伪装自己或许是他唯一可以生存下去方式。

我们生下来就是一张白纸，对于世界的认识方式来源于父母和兄弟姐妹。在这样阶级严明的旧式大家族里，父母没有教他认识世界的方式，他需要自己去探索，当发现人类的虚假与伪善时他大吃一惊，无处诉说，默默承受。他不自信，因为这种极大的不自信导致他不知道如何与人相处，害怕与外界接触，缺乏与人有效沟通的技巧和自我认同，难以融入残酷的现实环境，内心敏感脆弱。逗笑别人，是他唯一与外界接触的方式，但日积月累使他身心俱疲。“当我在笑的时候，只有我自己知道我在哭。”

（二）原生家庭的缺爱之痛

大庭叶藏的父亲是鼎鼎有名的政治家，基本上都在东京工作，所以他经常见不到父母，与他们也没有太多的交流。在这个旧式封建大家庭里，从小到大从未感受过父母的关怀，母爱和亲情丧失在童年的记忆之中，导致缺爱。

因为在原生家庭缺爱，所以害怕拒绝。

“我的不幸，恰恰在于拒绝的能力。因为我害怕一旦拒绝别人，便会在彼此心里留下永远无法愈合的伤痕。”

为人父母要知道拥有高学识只是人生的一部分，生而为人，最主要的是学习如何与世界共处，即便生活上有诸多不顺，那也是成为人的必经之路。而在家庭中，将孩子培养成一个拥有健全性格的人是父母的责任。究其根本，父母的爱和教育才是促使孩子健康成长的制胜法宝。

（三）新生家庭的失信之痛

新生家庭迎来了新的希望，大庭叶藏与良子结婚了。后来，他亲眼目睹了良子与男子偷情，自此以后，他丧失了对人的信心。在替良子喝下安眠药三天后，第一句话是：“回家”。可是他的家在哪，无迹可寻。酗酒、消瘦、吐血、药物上瘾使他的身体每况愈下。良子等人将他送进了精神医院，三年后，他被大哥安置在破旧茅屋里，年近60的丑陋女佣阿铁负责照顾他，然而他却遭到女佣多次性侵。

“瞬间不足以成为生命的喜悦，我只相信死亡那一瞬间的纯粹”或许唯有离世才是真正的解脱。

在人生的最后阶段，他将最真实的自己展现给世人，将自己不完整但全面的心路历程露骨地表现出来，这没什么好惭愧掩饰的，这的确就是他。他是一个多面派，一面对生活充满向往，“一切都会过去”，相信暴风雨过后一定会有彩虹。他看透了人的虚伪、冷漠、自私、伪善，或许释怀，“斜阳西下，已无法挽留，但第二天的太阳仍然会照样升起，给世界带来光明。”一面将生活的冷酷、炎凉世态写到极致，即使生命尽头，也要小心翼翼向世人呐喊：“生而为人，我很抱歉。回首此生，尽是可耻之事。”

结语

有些人用一生治愈童年，有些人用童年治愈一生。每个人都有不同的故事和际遇，随着自己成长的家庭，也有不同的回忆。无论是爱还是伤痛，“家”都是我们最初出发的地方，是我们一生中关系最密切的地方。所以，家是孩子性格养成的根源之所。而父母要懂得教育孩子远比赋予他生命意义重大，责任深远。

国之大计、教育为本。

天下父母，既然你们选择生下爱的结晶，请好好善待他们，好好教育、引导他们，毕竟你们是他的第一任老师，是在这个陌生星球上第一眼见到的亲人，在他们懵懂之际需要你们的呵护和培养。因为你们的关爱，世界可能会少一些孤儿、少年犯、抑郁症患者、性格缺陷等的少年儿童。

育儿是一门既修炼又考验的技术活、更是一门学问。对此我们要端正自己的育儿观，丰衣足食远比不上陪伴和精神上的安慰，将孩子捆绑在自己身边，让他们背负养育之恩的债务，莫不如放手让其远游。孩子是通过父母来到世界上的，但不是为了父母来到世界上的，他们是一个独立的个体，有自己的本能意识。人生怎么过他们自己说了算，他们有权选择过自己人生。

教会孩子做生活的实践者并不是旁观者，热爱并享受生活，不要让他们也发出“生而为人，我很抱歉”的呐喊。

xiv

异类

中国科学技术大学
科学岛分院修士2年
張兰

何不抬头仰望那无垠苍穹
我们不过是漂浮其中的一粟
岂知这地球为何自转
自转、公转、反转，一切都随他而去吧
到处都感受到至高无上的力量，
所有国家，一切民族，
都能发现相同的人性。
唯独我是异类？

以上是节选太宰治在《人间失格》中引入的《鲁拜集》的诗句，读完有一种虚无颓废之感，让我能清楚感受到书中的主人公大庭叶藏在这个充满理所当然的“指导原则”的世间作为异类

活着的恐惧和痛苦。叶藏是个从小体弱多病，敏感多疑的人，因为无法理解人类行为而终日惶恐不安，为了保护自己，他发挥“丑角精神”来逗乐他人以对人类最后的求爱，从开始的得心应手到被毫不起眼的同学竹一识破而感到精神崩裂，从和咖啡酒女殉情未遂开始，叶藏似乎就已被世间抛弃，而当他遇到了天真浪漫的妻子而终于开始准备好好生活时，最后却连拥有纯洁无暇信赖之心的妻子也被人玷污而失去了对人类的期待，一步步失去了当人的资格。

很多人初读《人间失格》时，了解到的只有一个阴郁的，畏惧人类的“异类”在不抵抗和讨好中一步步堕入黑暗的故事，实际上无论是在太宰治所在的旧道德和旧秩序被破坏，人们丧失信念的战后日本社会，还是如今这个人潮汹涌、物欲横流的后工业时代，无数个想保留自我的“叶藏”都注定了被庞大的社会价值所裹挟的命运。我们两手空空诞生于世，可能连命运都是被迫选择，我们依赖别人而生，也要依赖别人而死。我们知道人们相互欺瞒，却又能过着圣洁、开朗的生活。我们因为害怕被人群排斥抛弃，害怕无人依靠的孤独，所以主动去承认由社会的胜利者构建的普世价值，以此来融入人群，变成作为一个人“该有的”模样。正如弗洛姆在《逃避自由》所说：“现代人误以为自己知道自己想要什么，而实际上，他想要的是别人期待他要的东西”^{xv}，大多数人因为主动融入而看不到自己真正的内心，只有极少数人，即所谓的异类，像太宰治笔下的叶藏一样，即使对人类恐惧困惑，时刻感受他人即地狱，也能保持自己的本心，以不抵抗的姿态游走在这个得不到认同和理解的世间，虽然这样的异类从一开始便以注定会对这个世间绝望而“人间失格”。

太宰治的人生，似乎就是叶藏的真实写照，也离不开着“女人”、“死亡”、和“自杀”这样的字眼，也许是觉得自己生的罪恶，对现实的无力抵抗让他最终选择了自我毁灭。对物哀及其中蕴藏的瞬间美有着特殊感情的日本人，认为殉死的意义在于追求生命瞬间的最极致的美，就像那临风舞落的樱花，在日本人看来，就有一种因为由极盛转为衰落的感叹而产生的美，这种美，由于稍纵即逝而流淌着淡淡的哀伤，又由于死时的绚烂而有着向死而生的勇气。似乎日本的很多经典文学作品有意无意都藏有一种阴柔、质朴的美，也许和日本人信奉的物哀美学有着千丝万缕的关系。

《人间失格》与其说像是太宰治的一部私小说，不如说是太宰治将自己的异类的想法赤裸裸的展现在读者面前，给予世人以警醒，给予自己以安慰。“一切都将就此流逝”^{xvi}，所以文章最后叶藏称不上幸福，也算不上不幸，也许这是叶藏身为“异类”最好的结局，卢梭在《论人类不平等的起源和基础》中曾说：“所有人都朝着镣铐的方向奔跑着，满心以为这样便可以获得自由”^{xvii}，撑起这个世界运转的往往是人类的欲望，而这些欲望往往是被大多数人承认并指定的“合法”的海洋，我们每个人身在其中，却没有足够的勇气像叶藏那样保持自己的本心，我们似乎都甘愿沉沦，而太宰治笔下的叶藏，就像一盏孤独的灯在这默许的黑暗中发出如同萤火一样孱弱的光，即使历经多年，依旧熠熠生辉。

所谓经典就是即使跨越时间和国度也能给予世人以光芒。相比于叶藏，我们似乎都是学会了如何在这处处充满规则的世间努力活下去的平凡人，但似乎这样也没什么不好，我们过着平淡的日子，追求简单的幸福，就像动物园里的动物，心里可能向往广阔的自然，而脚下的土地、百步之外的牢笼却一步步提醒着要活在当下，也许所谓“生活圈”就藏着这个意思，圈起来的

不仅是生活和阶级，也有思想和信念，唯有没有“异类”想法的活着，我们才能融入周遭的生活，才能接住命运赋予的“恩赐”。

“借来”文化的重塑与新生

中南大学
交通運輸工程学院物流工程学部 2 年
陳楚婷

中国与日本虽不在同一块大陆，但却是一衣带水的近邻。中日两国在这两千年中，如同高大繁茂的榕树与如瀑布般覆盖在其上的根须，交织着，共同生长着；共生时分享，根须落地后又争夺。存于同一片土壤，互相影响着，没有人能将他们完好地彻底分开。

一引子

纵观中日文化交流史，中国往往是“占上风”的一方，因此中国人向来普遍认为，日本学走了很多我们的文化，比如汉字语音、文学艺术、技术工艺。曾经我也像大多数中国人一样，在面对日本文化时，往往将所有的重点放在其与我们的相似之处，而忽略了他们的特别之处。

直到我在一部纪录片中看到日本书法家对中日书法的理解。他认为，日本的书道虽然传承自中国的书法，但它的本质已经与中国的书法大相径庭了。中国的书法重视传统，讲究“打好基础，再筑高楼”；而日本的书道更多的是通过纸墨笔砚展现不拘一格的艺术形式，从一开始便鼓励创造性的个性展示，体现个人的精神境界与内涵。

我才突然意识到，那些被日本“借走”的文化与我们的传统文化早已经“貌合神离”。相同的石子投入两条不同的河流，随着时间的流逝，或急或缓，似清似浊的流水必然会打磨出两颗散发不同光泽的石子。日本向中国学习的文化，在勤劳的日本人民细心的培育下，生根发芽，开出了只属于日本的、绝无仅有的绚烂。甚至有些早已从中国的大地上消失的花朵，仍在这个小小的海岛上静静地开着，展现着让人无法忽视的强大生命力。

方圆之间

印章是中国传统文化之一，它集篆刻、雕刻，以及书法艺术为一身，往往被视为身份或者权力的象征。印章文化都曾在中日韩三国得到长时间的流传，印章成为官场批文、货币流通的必备身份证明，文人雅士也几乎人手一枚精致的私章。而如今的中国除了单位的公章和书画

章，在日常生活中已经很难看到曾经精致，做工极为讲究的私章了，大多都被签名所代替。三国中唯有日本将印章作为日常必需品沿用至今，成为了每个人生活中必不可少的一部分。日本人的一生中至少需要两枚印章，用于各种大大小小的场合。人们通常会找到制作印章的匠人专门定制，作为要伴随一生的物件，意义非凡。小小的圆形印章既是中日千年交流的见证，也是老匠人们几十年如一日心血的凝聚，更是印章文化在日本被赋予的全新意义与经久不变的传承。

如胶似漆

漆器，是两国在长达千年的文化交流中一个有力的见证者。两国的交流也如这胶与漆的黏合般，紧密相连，你来我往。漆工艺最初在中国诞生，对周边的国家产生了极大的影响；唐宋时期中国创造了许多高超的制漆技法，如“素髹”。直至这时，中国依旧是日本的“老师傅”。

然而到了元朝，情况便出现了反转。此前日本的漆器水平大幅上升，出现其民族特色的专有漆艺，并在传承中国漆艺的基础上，开发出独特的“蒔绘”漆艺。同时中国的漆艺发展逐渐单一化，中国漆工首次受命前往日本学习“倭漆”工艺。随后日本蒔绘漆器成熟，“倭制”工艺反向影响中国漆器。日本漆艺整体水平超过中国，随着大航海时代的结束，日本漆器终于在欧洲一举成名，从此“japan”便成了漆器的代名词。这些年中日两国的漆匠们来往密切，共同致力于保护与传承这两国共有的珍贵文化。

截金独留

截金工艺是我国古代工匠首创的贵金属装饰工艺，最早起源于南北朝时期，用来装饰佛像和绘画。在唐代时，截金技术已经基本成熟，并且随着佛教传入日本，对日本的佛教艺术产生了极大的影响。经过后来的考古发现，宋代以后的佛像壁画中截金的痕迹渐渐消失，这门精妙绝伦的优美艺术在它的发源地逐渐销声匿迹。与此同时，截金在日本一代一代艺术家们的努力下融合创新，逐渐发展出具有强烈民族特色的艺术作品，并将截金技术流传至今，被人们称为“终极的金工艺”。

如今世界上只有日本对截金工艺保持了不间断的活态传承。这与日本对非物质文化遗产的保护重视有关，上世纪70年代，截金工艺被认定为“重要无形文化”加以支持与保护，并且将三位杰出的截金师认定为“人间国宝”。此外还有每位截金师不断对截金的纹样、运用进行创新，为截金工艺创造了无限的可能与明天。

共筑匠心

在《京都手艺人》这本书中，我看到京都的匠人们怀着坚定的信念，呕心沥血地默默坚守，以自己之手承接源流，才让这些传统文化在此驻留。这样的“工匠精神”令人敬佩。中国是名副其实的文化大国，民间也不乏这样的能工巧匠，他们同样一生只做一件事，将中国优秀的传统文化源源不断的传承下去。

然而因为工业制造的发展、市场的萎缩以及后继无人的窘况，无论是中国还是日本的传统手工艺都难免有衰退的趋势，甚至面临着灭绝的风险。我认为中日两国应该保持密切的友好交流，在传统文化的传承创新或者修复保护上，相互借鉴，相互学习。这些文化艺术不仅是两

国的瑰宝，更是全人类的宝贵精神财富。中日应该携起手来，让两国的传统文化在人类文明的长河中成为无数永不磨灭的小石子，流光溢彩，群星璀璨。希望通过文化的桥梁，能促进中日经济等多方面的合作，努力构建契合新时代要求的中日友好关系！

后注：

阅读图书：

京都手艺人. [日]樱花编辑事务所编著, 刘昊星译

参考文献：

汤大友, 刘馨. 中日两国古代漆器文化交流的探讨[A]. 中国涂料工业协会, 北京

李文茜. 截金装饰技法及其应用价值研究[D]. 湖北工业大学. 2020

拥抱平凡

北京大学

北京大学物理学院物理学4年

李一一

我仍记得遇见又吉直树老师《火花》¹的那个晚上。

午夜十二点，昏黑的夜里只有桌上的台灯和面前的电脑还在发出幽幽的光。电脑中正全速运行着科研软件，电脑风扇在寂静中呜呜作响。等待软件运算结果要两个小时，坐在电脑前发呆时，我不禁回想起过去的一周时光：坐在电脑前没日没夜的运行软件进行数值实验，但每次计算的结果都不甚理想。那么，这次计算会和此前的任何一次有何不同吗？如果计算结果还是失败呢？如果此后的计算也都无法完成呢？如果我的科研项目最终宣告失败呢？那我日日夜夜的努力该何去何从？……

在深夜中孤独的等待不知好坏的未来时，迷茫和失落的心魔更容易趁虚而入，但正是这时，《火花》拯救了我。

这不是一个情节复杂的故事，它讲述了两个日本漫才师（搞笑艺人）德永 and 神谷的追梦旅途。同为不卖座的漫才师的二人在一次商演上偶然相遇，德永被神谷对漫才的全心全意所吸引而拜他为师。在二人相处十年的日常中，他们经历了穷困潦倒、选秀失败、失恋等种种挫折，最终德永选择了放弃漫才，而沦落到破产的神谷则选择了坚持。

在与德永相遇前，我从未想过，世上在追梦路途上挣扎的年轻人大多都与我们相似：面对无法预知的未来，我们都会被没理由的心虚和恐惧困扰；我们难以堵上一切，但又仰慕像神谷

一样义无反顾的勇者；我们不肯向现实屈服，但又不时想迈出那临门一脚；我们恐惧一事无成，但也恐惧自己主动让梦想完结。最重要的是，我们中的大部分都可能终于失败，这才是平凡的结局。

但在与德永相遇前，我亦从未想过，失败的人生同样值得被赋予价值。

在戴上成功者的冠冕前，鲜有人认可平凡人的努力。正如书名火花一样，绚烂的烟花绽放时，鲜有人去赞美那些飘零在空中的暗灰铁屑。但又吉老师选择了去刻画一个失败者，选择了用平淡的笔触去描绘德永内心的迷茫、不安和恐惧，选择了温和的接纳德永的失败。

“花很长时间做一件没必要的事情是很可怕的吧？在人人仅有一次的人生中，挑战一件也许是不出成果的事情是令人胆寒的吧？排除无谓的徒劳，那就是在刻意回避风险。无论是胆小鬼，还是自作多情，甚至是无可救药的傻瓜，只有敢站到遍布风险的舞台上，全心全意为颠覆世俗常规而勇于挑战的人，才能成为真正的漫才师。只要明白这一点，那就足够了。长时间地经历这种无谋划的挑战中，我已经得到了自己的人生。”这是德永放弃漫才时留下的最后一段话。

同为在追梦旅途上奔跑的青年，其中深意触动了我——在一个竞争激烈的行业中奋斗，失败才是平凡，但每一个失败者的经历并不是无意义的。在追梦的旅途中，失败者不仅完成了自身人生的一段重要旅途，更构成了整个行业绚烂烟花的一粒铁屑尘埃。借助德永，又吉老师安抚了每一个年轻追梦人迷茫而惶恐的内心——去看透“失败的才是平凡”的现实，但是认可平凡和失败的意义，才能给予年轻人在恐惧和迷茫中坚持追梦的勇气。

事实上，时代的霓虹总聚焦于成功者，能够拯救平凡大众之迷茫和苦楚的，大概只有文学了。在当代日本文学中，用温柔的笔触去拥抱最平凡的痛已然成为风潮。

对于出生在不幸的家庭中的孩子，自卑和愧疚是平凡。在《鱼河岸小店》²中，西加奈子老师就选择了描摹这样的普通孩子，去传达“你以为是失败人生，也许是别人努力活着的结果”的希望号角。

对于在工厂中工作的一般工人，寻找寄托以赋予人生意义是平凡。在《绿萝之舟》³中，津村记久子就选择了描摹这样的普通女工，去指明在日复一日的人生困境中寻找意义的可能。

对于与社会生活模式不同的“怪人”，不被理解而被另眼相待是平凡。在《人间便利店》⁴中，村田沙耶香选择了描述这样的普通店员，去赋予一个个另类人格社会性和自我认同感。

去描述平凡，最绕不过的就是迷茫和痛楚，因此也常有人将其称为“丧文化”。但我以为不然——日本作家们虽着眼于平凡之痛，但并非用犀利的笔触去揭露，而是用温和的语言去陈述；他们并非夸张地刻画普通人的悲惨痛苦，而是真实地描绘平凡中的淡淡哀愁；他们并非批判平凡的生活，而是爱抚凡人的心伤。

古有小林一茶吟俳句：“我知这世界，本如露水般短暂，然而，然而……”用笔锋一刀斩开现实的悲哀，但又温柔的呵护着受伤的人，这是日本文化传承千年的精气，也是日本文学中的“菊与刀”。尽管描述着平凡世界的无奈和残酷，但日本文学家下笔的目的永远是爱护和拯救。正是这样大和民族独有的温柔，让日本文学从“丧文化”中超脱，而指引读者成为“认清生活

的真相后仍然爱它”的真正成功者。

读完《火花》的那天晚上，科研软件的计算结果依然不甚理想。我不禁想，或许我也终将成为德永，在追梦旅途中挣扎十年最终放弃，但与其沉浸于迷茫和不安中无法自拔，何不在走到末路前，再坚持看看？

- 1 又吉直树. 火花. 北京:人民文学出版社, 2017. 第 153 届芥川文学奖获奖作品
- 2 西加奈子. 鱼河岸小店. 长沙:湖南文艺出版社, 2018.
- 3 津村记久子. 绿萝之舟. 上海:上海文艺出版社, 2014. 第 140 届芥川文学奖获奖作品
- 4 村田沙耶香. 人间便利店. 长沙:湖南文艺出版社, 2018. 第 155 届芥川文学奖获奖作品

品日本文学书籍，知百般治愈力量

武汉大学
信息管理学院修士3年
黄靖

全球蔓延的新冠疫情，不仅极大地冲击着人类世界的秩序，也在人们的心中堆积了无尽的阴郁，在这样的背景下，村上春树推出过一期特别的电台节目——“迎接充满希望的明天的音乐”，这是来自日本的治愈系，在此刻又一次向世界施展着它温柔魔法。

“治愈系”一词，特指一种能放松心灵，予人温暖与慰藉的力量。尽管全世界都有类似的治愈文化，但日本治愈系的独特之处就在于它的深刻性与影响力，其承载着日本人的生活哲学，带着宗教般的热忱，抚慰着世界。我想，倘若存在这么一期电台节目，让不同年代的日本作家们一同分享书籍中的治愈力量，他们会聊些什么呢？也许，节目会这样开始。

开场音乐是一曲低低浅浅的童谣哼唱，“夜里的飞虫啊/向着明亮那方/向着明亮那方/哪怕只是分寸的宽敞/也要向着阳光照射的方向/住在都会的孩子们啊”，不消说，这是金子美玲的作品^{xviii}，她的童谣曾长久播放于日本“3.11”大地震灾后的公益广告中，宽慰着广大日本民众饱受创伤的心灵。伴着这美妙的音乐，中勘助的声音响起：“各位，充满童真的书籍可是蕴藏着无尽的治愈力量呢”，于是，他聊起了《银茶匙》^{xix}，极细腻地分享起书中的童年碎片，初夏黄昏的晚霞，海风中静静的松原，晴夜里黄色的月亮，蓝红条纹色的糖，兔子的歌，闪烁的佛光，暮春的暖风，绿色的原野，山间的回音，春天的风筝，各类花草鱼虫，以及姑母永远说不完的故事。于是乎，整个电台的氛围变得澄澈自然，纯真明净。

“或者，可以从纯爱作品中寻求治愈”，这是三岛由纪夫的声音，有种很难得的温柔，他聊起了自己的代表作《潮骚》^{xx}，有一座叫歌岛的小岛，海湾的细浪卷起又退去，在岛上，有备受海神宠爱的青年渔夫新治，美丽的少女初江，以及他们间纯洁的恋爱。这是一个极唯美的牧歌故事，仿佛埋藏着三岛在战后对某种青春且圆满的“清静之所”的向往。听到自己的学生兼挚友分享，川端康成表示了认同，纯爱作品中的治愈感，也许就是“当我拥有你的时候，无论是在百货公司买一条领带，还是在厨房收拾一尾鱼，我都感动自己是一个幸福的女人。爱像一股暖流滋润着我”。这是来自《伊豆的舞女》^{xxi}中的一段，浪漫且甜蜜的空气渐渐充盈在电台里。

“对于将来的梦想，以及刻骨铭心的恋爱等等，即便描绘不出来，我也朦朦胧胧怀有这样的期待的”^{xxii}，青山七惠接过川端的讲述，“希望的想象，也是良药呢”，接着，她借《村崎太太的巴黎》中村崎太太的口吻说道，“总之，距离咱们这么老远有那么美丽的地方，咱再怎么难过，那些地方也永远是美丽的，今天也一样”^{xxiii}。听到这，一直沉默不语的太宰治似乎有被触动，“我也设想过一个美妙的画面”，他顿了顿，“一对善良的夫妇，出人头地，蜜柑，春天，直到结婚，鲤鱼，翌桧”^{xxiv}，这画面是极温馨又极美满，鲤鱼代表鱼跃龙门，翌桧比喻明天会更好，短短几句，就道出了人世间最平凡的幸福。可见再颓废消极的人，也是怀着美丽的期许的。大家心里都这么想着。

“不存在十全十美的文章，如同不存在彻头彻尾的绝望”^{xxv}。村上春树总结道，“秘方也许还在与自然相关的作品中”，翻动书页的声音响起，他用温暖的声音分享着《兰格汉斯岛的午后》中的一段，“连枕在头下的生物课本也发出了春的气息。青蛙的视神经和那神秘的朗格汉岛同样春意盎然。闭起眼睛，传来河流流淌的声音，流得就像在抚摸柔软的沙地”^{xxvi}。春天的灵韵太过动人，德富芦花也谈他的《春天七日》：“一朵朵黄色的花朵摇曳多姿。结出红色花苞的瑞香也张开了白色的口子。春兰、水仙都含苞待放。云雀叽叽喳喳叫个不停，麦田里雾霭袅袅升腾而起”^{xxvii}。也许是因为这严酷的疫情背景，两位远隔时空的作家分享的都是春日融融的时刻，也许，“聊寄一枝春”就是治愈系最好的注脚。

尽管一切都是想象的场景，但如果真的存在一期以治愈心灵为目，以日本文学探讨为核心的电台节目，会给人们带来多少抚慰啊。品日本文学书籍，便知百般治愈力量，这也让人好奇日本文化中为何潜藏着如此丰富的治愈系元素，我想，原因大概可以从日本人的自然观和社会观中略见一二。从自然观的角度看，由于自然崇拜，日本人多主张在回归自然中疗伤，在亲近自然中汲取安全感，所以治愈系渴慕的多是一种极朴素的生命状态；从社会观的角度来看，治愈系则是身处高速发展社会的日本人对复杂人际关系与社会压力的回应，它以某种简单与幻想性，帮助人们抵御个体与社会的异化。这些都是治愈系的智慧之处，它看清生命的有限和爱的边界，所以，爱而不沉湎其中，并不断刷新着爱的体验，化解着人类的精神危机。

其实，书籍的存在本就是一个治愈人心的避难所，人们可以随时退避其中，但若要对症下药，何不试试翻阅一下这些带有治愈色彩的日本文学书籍？读之品之，它们总让我联想起特鲁多医生的墓志铭，“有时治愈，常常帮助，总是安慰”，在硬邦邦的世界里，把一切都解构，都化约为最纯真的爱、温暖与感动，它们何尝不是医术的一种？含蓄，但充满伟力。

读《人间失格》有感

安徽外国语学院
国际经济学院3年
高辉

“我们所认识的阿叶，又诚实又乖巧，要是不喝酒的话，不，即使是喝酒……也是一个神一样的好孩子呐。”

《人间失格》这本书读到这里就已经到了尾声，我不知道该如何表达这种情绪，只觉内心如同滚在玻璃残渣上一般让人窒息，好在它结束了。

从翻开这本书的第一页开始，我感觉自己整个人都沉浸在一种压抑、无望的情绪里。

很难想象着世界上居然有人这样痛苦的活着，他生而为人，却对人类畏葸不已，并因这种畏葸而战栗。

阿德勒曾经说过，幸运的人用童年治愈一生，而不幸的人一生都在治愈童年。我想书中的主人公大庭叶藏应该是后者吧！

自幼多病的他成长在一个不愁吃不愁喝的富贵人家，但是他却对“饥肠辘辘”的感觉一无所知。他坐在那幽暗的房间的末席上，因寒冷而战栗。

原本应该是少年花季的岁月里，他却遭受了家中女佣的侵犯。这也使他内心黑暗的种子开始萌芽，逐渐将自己和这个世界隔离开来，仿佛自己是游离于这世间外的旁观者。

他开始为自己的幸福观与世上所有人的幸福观风牛马不相及而感到不安，每夜辗转难眠，乃至精神发狂。最后用“只有活得愚昧或活得无耻的人，才能沉浸在幸福之中”这一套说辞来说服自己。

甚至对自我的言行没有了自信，将自己封锁在无尽的黑暗里，将精神上的忧郁和过敏封闭起来，伪装成天真无邪的乐天外表，使自己一步一步地彻底变成了一个滑稽逗笑的畸形人。

慢慢的他开始分析周围每一个人的喜好，把自己伪装成一个乐天的小丑。明白如何取悦父亲，让老师心生愉悦，甚至得到学校里众人的拥戴。

他给自己蒙上了一层保护衣，就像是一个胆小鬼将自己的真实面目藏起来。他以为自己逗笑人的本领已经掌握的天衣无缝了，可是还是被竹一看出了破绽。

一句“故意的”让他的生活被恐惧与不安包围，就像是自己的完美面具被人生生撕裂，露出他自己都不敢直视的、内心最真实的丑态。

他迫切的想要拉拢竹一，与他成为朋友。但是表面的和善和内心的煎熬，懦弱胆小的他又怎么能体会到友情的温暖呢？

他再次用“这世间，所谓朋友真正的面目，就是在相互轻蔑而又互相往来并自我作践”的感慨来继续说服自己。

后来他因为逃学被家里放弃，开始如同不系之舟般的自我放逐。在画廊私塾认识的堀木教会他烟酒，娼妓，也因此他遇到有夫之妇的常子，两个历经风霜的苦命人，如同泊海的船找到了归宿。相互慰藉后，打算一同奔赴黄泉，但是命运与他开了个玩笑，常子死了，他活下来了。

苟活下来的来并没有多快乐，浑浑噩噩的度过了一段时光后，他遇到了善良的静子母女。原本以为是幸福的开端，却不知可悲的是“胆小鬼连幸福都害怕，碰到棉花也会受伤。”

“爸爸可不是因为喜欢喝酒才喝的。只是因为他人太好了……”

静子的女儿繁子的话就像是一把锐利的匕首硬生生的刺痛他那沉寂已久的心。想他不久前还偷拿了静子和服上的腰带和衬衫去当铺上典当，然后用换来的钱去银座喝酒。

相形见绌的他觉得自己就像是一个混蛋，给她们母女俩的生活搅和的一团糟。长久的羞愧感让他最终逃离了静子的家。

可怜的他卑微到谷底，幸福对他来说是那么遥不可及。他开始自暴自弃。一直用烟酒麻痹自己，好似这样他就离悲伤远了一点。

良子的出现让他暂时忘记了过去的那些“耻辱和罪恶”，让他得到了新的救赎，他开始慢慢的摆脱了颓废开始了新的生活。

可是好景不长，良子被商人强暴了。比起良子身体的玷污，他更在乎的是良子对他人的信赖遭到了玷污。那种纯真无暇的信赖之心恰如绿叶遮掩的瀑布一样赏心悦目，可是他一夜之间蜕变成了发黄的污水。

纯洁无暇的信赖之心有什么错呢？他一遍遍质问自己。良子仿佛就是曾经的自己，他所有的希望就在那一瞬间被瓦解。就像是病入膏肓的病人在不断的挣扎之后放弃了生的希望，他放弃了这个世界。

这世道的混乱，人情的薄凉，现实的惨淡……这一切的一切让他恐惧、让他不安。他像是一只搁浅的鱼，所有的水分被抽干后，他失去了生而为人的资格。

怀着压抑的心境看完这本书，感触颇深。我懂叶藏的感受，就像小时候感冒被逼着吞下药，结果药卡在喉咙里不上不下，只能等它一点一点的在口腔中融化，最后被苦楚蔓延整个味蕾。

我和叶藏有很多的共鸣之处，但是我清楚的知道我不是叶藏。我心疼他的遭遇，但是不认同他的选择。

如果我是叶藏我会好好活下去，就像竹一说的那样“你以后会是一个著名的画家”。为什么质疑自己呢？即使所爱隔山海，也终有一天会抵达。

这世间根本就没有真正乐观的人，大家都掩藏了自己消极的情绪好好生活。放眼过去，车水马龙哪一个不是为了生活而生活。每个人都为了材米油盐奔波着，他们也会有片刻迷茫、哀伤，但是他们会为了所热爱的、向往的勇敢前进。

或许你是不幸的，但是你可曾想过还有人比你更不幸。他们苟延残喘，拼命的活着。你有什么理由自暴自弃？顾影自怜？

明天的太阳依旧会高高升起，我们有这么好的生活条件，没理由自暴自弃。

风雨欲催我，我偏逆山行。生而为人，请怀着感激的心境好好活着，热爱这个世界。

陌生人，祝你面朝大海辽阔，春暖花开芬芳。

-
- i 『菊と刀』、ルース・ベネディクト
- ii 原石鼎の俳句
- iii 『松林図』、長谷川等伯
- iv 《菊与刀》，鲁思·本尼迪克特
- v 日本俳句，原石鼎
- vi 《松林图》，长谷川等伯
- vii 阅读书籍：山冈庄八 著 杨世英 译《织田信长 菊与刀》
司马辽太郎 著 马静 译《国盗物语 织田信长》
赤军 著 《天下布武 织田信长》
- viii 《花未眠》
- ix 《花未眠》：“我之所以发现花未眠，大概也是我独自住在旅馆里，凌晨四时就醒来的缘故吧。”
- x 《参加葬礼的名人》
- xi 《自夸十讲》
- xii 《临终的眼》
- xiii 诺奖演说词“现今我生活的世界，是一个像冰一般透明的、又像病态一般神经质的世界。……我什么时候能够毅然自杀呢？这是个疑问。”
- xiv 读《人间失格》有感
- xv 出自弗洛姆《逃避自由》
- xvi 出自太宰治《人间失格》
- xvii 出自卢梭《论人类不平等的起源和基础》
阅读书目为太宰治的《人间失格》
- xviii （日）金子美铃著；闫雪译. 向着明亮那方[M]. 长沙：湖南文艺出版社. 2019.
- xix （日）中勘助著. 银茶匙[M]. 江苏凤凰文艺出版社. 2017.
- xx （日）三岛由纪夫著；陈德文译. 潮骚[M]. 北京：人民文学出版社. 2013.
- xxi （日）川端康成著；叶渭渠，唐月梅译. 伊豆的舞女[M]. 海口：南海出版公司. 2014.
- xxii （日）青山七惠著. 一个人的好天气[M]. 上海：上海译文出版社. 2007.
- xxiii （日）青山七惠著. 窗灯[M]. 上海：上海译文出版社. 2009.
- xxiv （日）太宰治著. 津轻[M]. 台北：马可孛罗文化. 2014.
- xxv （日）村上春树著；林少华译. 且听风吟[M]. 上海：上海译文出版社. 2001.
- xxvi （日）村上春树著；安西水丸图；张致斌译. 兰格汉斯岛的午后[M]. 时报文化出版公司. 2002.
- xxvii （日）德富芦花著. 春天七日[M]. 西安：陕西人民出版社. 2015.

「笹川杯本を味わい日本を知る 作文コンクール 2020」(日本語版)

入賞作品

目 次

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」（日本語版） 一等賞作品

大連外国語大学 ソフトウェア学院	李聡.....	3
南通大学	劉華.....	4
遼寧師範大学 日本語学部	余懂欣.....	5
上海外国語大学日本文化経済学院	郭倩钰.....	7

★「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」（日本語版） 二等賞作品

延辺大学 日本語学科	蔡蕙仙.....	9
中央財經大学 外国語学部・大学院	王麗媛.....	10
北京師範大学 日本語学部	尚楚岳.....	11
北京外国語大学 日本語学部	倪笑依.....	12
大連外国語大学 日本語学部	詹鑫.....	14
河北大学 日本語学科	閻芊婧.....	15
西安交通大学 日本語学科	張佳穎.....	16
北京語言大学 東方言語学部日本語専攻	李林億.....	17

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(日本語版)

一等賞作品

欠かせない自分の考え

大連外国語大学
ソフトウェア学院3年
李聡

“Let’s think.”

これはドラマ『3年A組』の一つのセリフです。それを聞いて、私は深く考え込んでいました。

卒業式の前日、柊一颯先生は生徒の澪奈が自殺した原因を調べるために、クラス全員を人質にして、ネットで生放送しました。澪奈は優秀な水泳選手でしたが、SNSでドーピングをしたという動画が曝されてから、ネット上でも罵詈雑言や中傷が絶えず、真実を知らなかったクラスメートに孤立させられました。このような暴力は高校生にとって身体上の傷害にも劣らないほどつらいものです。柊一颯先生は極端な方法を選んでいましたが、人質になった学生たちとネットユーザーに教訓を与えていました。スクリーンの前でそれを見ていた私も強くショックを受けました。このドラマはネット暴力を生き生きと表してくれました。これはインターネットが発展してきた今では、人々が最も注目している話題の一つでもあります。

我々人間は何か道徳に反することを見たら、ほぼすぐに反射的に非難します。しかし、その目で見たことが本当に事実なのか？澪奈は本当にドーピングをしていたのか？誰にも胸を張って断言する権利はありません。本人にしか発言権はないのです。

『オックスフォード辞典』によって2016年度のその年を最もよく表す言葉として“post truth”という言葉が選ばれました。“post truth”とは「客観的事実を述べるよりも感情と個人の信仰に訴える方が民意に影響を与える状況」という意味で、事実はまだ重要ではなくなっています。私達はいわゆる「事実」に基づいて善悪を判断しているわけではありません。「真実がまだ靴を履いている間に、うそはもう市内を駆け巡った」というチャーチルの名言があるようです。今のような情報社会では、ネットを通してなんでも手に

入れることができます。文字も絵も短い動画もなんでもあります。しかし、それは必ずしも真実を表してくれるものではないのです。

私が言ったその言葉で、言われた人がどれだけ傷ついたのか、自分ではわかりません。さらに、自分が言ってしまった言葉が自分の本心ではないこともあります。我々はただ多数派の視点から、自分で何も考えずに勝手にこんなにも人を傷つける言葉を言ってしまいます。ですから、日常生活でもネットでも、もっと自分で考えれば、世の中で潯奈のような悲劇はなくなると信じています。

「うわべだけで物事を見るな、本質から目を背けるな、よく考えるんだよ！」と佟先生が言ったように、ネット生活の中でどんなことに会ったとしても、よく自分で考えて、自分の見解を持たねばならず、人の話を受け売りしてはなりません、人の心を傷つける「ナイフ」を突き刺してはいけません。“post truth”の世界にならないために、ネット暴力をなくすために。“Let's think.”

ドラマ『3年A組—今からみなさんは人質です』感想文

今度やろうは馬鹿野郎

南通大学
4年
劉華

過去、いろいろな日本のドラマを見てきた。大学で日本や日本語について学んでいるが、実のところ、日本のドラマを通じて、本物の日本を知るようになったと言っても言い過ぎではない。ドラマに映る日本の素敵な景色、例えば、日光街道の杉並木やどこまでも青く清い琵琶湖、雄大な富士山などとてもすばらしい。それらのすべてが大好きだ。ドラマ登場人物のセリフから、日本人の物事をはっきりさせない曖昧さも実感する。もしある人が好きになれば、愛してるとは言わないけれど、好き、大好きっていう。日本のドラマから、そんな日本語の曖昧さを何度も実感した。しかし、中国人としては直接的に自分の言いたいことをはっきり言いたい。電話をする時、中国人は「もしもし、私は劉です。」と言う。日本人は「もしもし、劉ですけど。」と言う。小さな違いだが「けど」をつけて向こうの雰囲気や推し量りながら、遠慮がちに電話をする。そんな曖昧さが好きだけれど、逆にちょっとした直接的な日本語に感動する時もある。

例えば、「いつやるか？今でしょう。」という林修の流行語。聞けばすぐに元気が出る。

これは「時間を潰すな、今仕事とか勉強とかに取り掛かりなさい。」という意味の言葉だけれども、私は林先生の短い言葉を聞いた瞬間、毎日何もしないで時間を潰すのは罪だと心から納得する。

「プロポーズ大作戦」というドラマで、主人公の岩瀬健は、思いを寄せていた幼なじみの吉田礼に告白できないまま無為に、時を過ごしてしまった、そして、結局彼女の結婚式に友人として出席するということになる。彼は妖精の力を借り過去に戻る恋の成就を試みるためだ。しかし、残念なことに、最終的に彼は未来を変えることはできなかった。過去をやり直しても、結局最後まで、彼は吉田礼に告白することが出来なかったのである。残念な結果は変わらなかった。吉田礼のおじいちゃんが言った。

「今度やろうは馬鹿野郎。明日やろうも馬鹿野郎。思い立ったらすぐ何でもやらなきゃダメだ！」この言葉は私に刺さった。

この短いセリフを聞いた瞬間気がついた。今までの自分は何をやってきたのか。いつも明日があると思ひ、やろうと思ったこともすぐには実行せず今度やろうと自分に言い訳して自分を慰めてきた。「今度やろうは馬鹿野郎」このセリフが私を変えてくれた。思い立ったことはすぐに行動に移す。美味しいと思ったら、その場で言葉にする。会いたいと思ったら、いつでも会いに行く。言いたいと思ったら言え。言わなくても伝わるなんて思ったら大間違いだ。私はそのように行動の基準で生きることにした。

時間には限りがある。有効に使うか無駄にするかは、自分の使い次第だ。いつも明日があるからと思ったら痛い目にあうだけだ。死んでいく時にやりたいことをやって良かったと後悔しなかった者が勝ちだ。

ドラマ：「プロポーズ大作戦」

和辻哲郎「古寺巡礼」

-----仏像を通した東西の異文化交流

遼寧師範大学

日本語学部 2017 級

余懂欣

「四天王の着ている鎧も興味を引いた。皮らしい性質がいかにも巧妙に現わされている。両腕の肩の下のところには豹だか獅子だかの頭がついていて、その開いた口から腕を

吐き出した格好になっている。その口には牙や歯が刻んである。それがまたいかにも堅そうな印象を与える。」この部分を読んだ時、私は東大寺の四天王の前に身を置いている感じがした。荘厳な空気の中で、四天王の表情が恐ろしければ恐ろしいほど、私たちを守ってくれる力強さと安らぎを感じる。「仏菩薩はインド風あるいはギリシア・ローマ風の装いをしているのに、何ゆえ護王神の類はシナの装いをするのか。」和辻哲郎は四天王を通してインドとギリシア・ローマ、中国の文化の結びつきを考えている。それは仏教が日本に伝ってきたシルクロードを通じた東西の文化交流である。

「古寺巡礼」は作者の和辻哲郎が哲学専門を卒業してから五年後に、奈良の古寺を見学して書かれた印象記である。人々を救うために作られた仏像を和辻は仏教美術という視点から捉え直している。では、和辻はどのようにして奈良の古寺を巡礼したのだろうか。仏教の伝わってきたシルクロードは最初、和田玉と汗血馬を輸入するための道であった。貿易の範囲が拡大すると中国からはシルク、ローマからはガラスなどが交易されるようになった。前二年、仏教がインドから中国に伝わった。仏教が日本に伝わってきた長い道のりを考えると、四天王にギリシア・ローマ芸術の影が見られるのも理解できる。和辻は奈良の古寺を巡礼しながら、仏教を通じた東西の文化の交流と融合を見ているのだ。

アジアでは、様々な仏教芸術が発展している。中国でも日本でも仏像は一見、同じように見えるが、細かく比較してみると、地域や時期によってそれぞれ異なった特徴がある。例えば、奈良の唐招提寺の盧舎那仏と洛陽の龍門石窟の盧舎那仏と比べてみよう。石窟の盧舎那仏は則天武後の顔を真似て作られたそうだ。石窟の盧舎那仏は神秘的な微笑みを浮かべている。それに対して唐招提寺の盧舎那仏は優しさと暖かみを感じる。仏像や観音像というと、私にも思い出がある。引っ越しの時、母に連れられて観音像を買いに行った。戸棚の中に色々な観音の顔が並んでいた。「好きな観音様を選んでいいよ。」と母は言った。ひとつひとつの観音像はそれぞれ魅力があった。それは観音像の中に様々な地域の文化が交じりあって融合しているからだと思う。

異文化交流は新しい文化を生み出す。私の中にも異文化交流がある。私は日本語を通して日本文化という異文化を学んだ。だから私の性格には中国文化の「実行の早さ」と、日本文化の「粘り強さ」という両方の文化の長所がある。東西文化や中日文化の交流と融合は二千年以上前から続いている。阿倍仲麻呂や鑑真和上のように、私は中国の文化と日本文化の良いところを合わせて、更に素晴らしい文化を作っていきたい。それが私の巡礼である。

祭りで繋がる―「祭りのない夏に」を見て

上海外国語大学

日本文化経済学院 2年

郭倩钰

今年は例年とは異なる。なぜなら、今年は新型コロナウイルスの災いに見舞われたからだ。新型コロナウイルスは人々の生活に大きな打撃を与えた。各地では様々な祭りが中止に追い込まれた。NHKの『新日本風土記』が放送した「祭りのない夏に」は、日本の夏祭りの現状と過去の風景を描いた。私はそのドキュメンタリーを見て改めて夏祭りが日本人にとってどれだけ大切かを感じさせられた。

今年の夏は祭りが相次いで中止となった。祇園祭、ねぶた祭など有名な祭りの名前がいくつも出てきた。その多くの物語の中で、ねぶた祭に関わる親子の話が最も印象的であった。ねぶた師は一年間かけてねぶたを作り、ねぶた祭りで他のねぶた師と腕を競う。木村春一は最優秀賞を二度受賞した父の背中を追い、ねぶた師の世界に飛び込んだ。春一は父に対し、うれしい気持ちもあれば、悔しさもある。その悔しさが自分の頑張る力になり、春一は腕を磨いている。私はこの二人の物語に強く心を打たれ、素晴らしい親子だなと思った。祭りを通し、親子の絆が一層深くなったように感じる。

そして、その過去の祭りの風景を思うと、今年は静かな年となってしまい、何だか切ない。日暮れと共に現れる提灯のトンネル、大声で叫びながら神輿を背負う男たち、いずれも地元の人々の祈りの証である。

しかし、新型コロナウイルスのせいで、今年は一緒に盛り上がるできない。日本の人々の残念な気持ちが私にもよく分かる。新型コロナウイルス感染爆発は、ちょうど春節休暇に起こった。故郷に帰ることができず、オンラインで家族と一緒に年越しをした。去年は大晦日には家族そろって夕食を食べながら、年末番組を観賞していた。しかし、新型コロナウイルスの深刻な状況にあって、そうしたことさえ不可能なことになってしまった。その時、一緒にギョーザが食べたい、新年の挨拶回りに行きたいと心の底から叫んでいた。そのためか、ドキュメンタリーで「悲しい、来年まで遠すぎる」と泣いている女性を見た時、自分も泣きそうになった。国籍は違うが、その感情は身に染みて理解できる。国境を越えたつながりができたように感じる。

一方で、質的な距離は遠ざけられたが、心の距離は近くなった様子も映し出されていた。阿蘇のおじいさんは祭りのために育てた稲を手で握り、落ち込みながら、「コロナに気持ちじゃ負けたくない」と力強い言葉を言い出した。そして人々は互いに距離を取りながら、それでも懸命に歌い続けていた。祭りがなくても、地元の人たちの絆が切れることはない。むしろ祭りがなくなったからこそ、その大切さを改めて確かめ、来年こそは熱狂する夏になるようにと祈っているのではないだろうか。それは祭りの力であり、その力が

地元の人々をずっと支え続けている。

このような絆はコロナ問題に打ち勝つ原動力になるだろう。来年こそ、祭りに燃える夏となり、人々の笑顔がもう一度見られることを願っている。

「笹川杯本を味わい日本を知る作文コンクール 2020」

(日本語版)

二等賞作品

宮部みゆき—「火車」を読んで

延辺大学

日本語学科 2017 級

蔡蕙仙

初めて日本の小説に触れたのは、中学生の頃「火車」という小説を読んだときであった。それから日本の小説にハマって、また日本という国を愛するようになった。「火車」を書いた作家は宮部みゆき、日本のミステリー作家で、私が一番好きな作家でもある。

小説は主人公である刑事本間俊介に、妻の親戚の栗坂和也が尋ねてきて、行方不明になった婚約者関根彰子を探してほしいと頼みから始まり、本間の視点で事件の真相に近づいていく。本間は捜査で関根彰子が五年前の自己破産がバレて逃げたのだとわかり、彼女の自己破産の手続きを手伝った弁護士を尋ねるが、そこでとんでもないことを知ってしまう——彼女は関根彰子本人ではなく、関根彰子の身分を偽装していたのである。

中学生の時は中国語で読んだが、日本語ができるようになって、二年生の時、日本語で書かれた原文を読んだ。初めて「火車」の原文を読んで、その文の繊細さがそのまま伝わってきた。訳本では感じられない日本語特有の静かな雰囲気、豊富な感情表現を心で感じ取ったのである。宮部みゆきの文章では、すべての人物がそれぞれの個性を持ち、文章の一字一句が一人一人の人物を生きているかのように形作っていた。何より素晴らしかったのは、主人公である新城喬子の人物像である。それは、捜査中に彼女と接触のあった人々から聞き出した内容を基に、彼女のイメージがほぼ完成されているというところだった。彼女がどんな境遇に遭ったのか、なぜ他人の身分を奪わなければならなかったのか、作品を読んでいるあいだに理解できるようになったのである。訳本では感じられなかった繊細さと表現の豊かさ、本を読み終わった時、思わず「これこそ本物の宮部みゆきだ」と叫んだ。

「火車」は決して優しい物語ではない。この作品では、社会的問題としてカードローン、カード破産、借財と多重債務をめぐって、社会的地位が低く、親兄弟も、身内の人も

いない、借金に翻弄される女性たちの人生を描いていた。まさに残酷で「優しさ」を云々する余地もないのではないかと思うかもしれないが、苦味の中にほんのり漂う甘さのように、宮部みゆきはそのリアルな残酷の中から暖かさを書き出したのだ。物語はものすごくリアルなものの、結末は優しいというのを強く感じた。また、非情な現実を語る一方、カードローンに追われる彼女たちのために代弁しているという感じも少しあった。普通カードローンと言えば使った人が悪いという印象があるが、これを読んで、自分にも十分に起きうることだと教えてくれたような気がした。これがまさに読者を魅了する宮部みゆきの作品の優しさではないかと思う。

「火車」は私にとって日本という国に踏み入る「扉」のような作品であった。私はその扉を越えて、日本の美しさと優しさを知ることができた。そして今度は私がその扉をみんなに開けるために、翻訳者という、近くて遠い夢に向かって前に進みたい。

新時代の「薨」と中日友好

中央財経大学
外国語学部大学院1年
王麗媛

2020年2月、新型コロナウイルスの影響で中国の多くの地域でマスクや防護服など医療物資が不足していた際、日本の各界から支援物資が続々と届けられていた。そのなか、日本青少年育成協会が湖北省内の大学などへ寄付したマスクや体温計の段ボール箱に書かれた「山川異域、風月同天」という漢詩は話題となった。その漢詩は、約1300年前に日本の長屋王が唐に送った千枚の袈裟に縫い付けられた「山川異域、風月同天。寄諸仏子、共結来縁。」という詩句に由来する。長屋王の誠意に感動された鑑真が日本へ渡ることに決意したと古書に記されている。日本から中国への緊急支援に対し、中日友好交流の歴史のエピソードが再び蘇って、ネット上で「武漢への支援物資に、1300年近く前の長屋王の言葉を添えて想いを伝えるなんて、胸熱。」などの声が広がっている。

鑑真の話から井上靖の歴史小説『天平の薨』を思い浮かべた。天平時代、日本の留学僧は鑑真を誘うために中国へ派遣された。彼らが幾多の紆余曲折を経て、異国で客死し、あるいは海の藻屑と消えていった。そして留学僧の願いに応え、鑑真は五回の失敗を経て盲目になりながらも、やっと六回目の渡海で日本にたどり着いた。つまり『天平の薨』には留学僧と鑑真の強い意志と献身精神、また昔からの中日友好交流の難しさが力強く描かれている。その題名の「薨」とは「家屋の背」のことである。日本への帰国を果たした留学

僧の手元に、やがて唐から持ち帰った一枚の甍があった。後にその形を用いて、唐招提寺の金堂が完成されたのだという。井上靖がきっと唐招提寺の甍に目を向けて、ありとあらゆる苦難をなめ尽くした鑑真と留学僧のことを思い出して、「甍」をその交流の証として小説を創作したのだろう。

新時代に入った今、この小説を再読してみたら、「甍」は家屋建築の重要な部分だけではなく、中日両国の人々が友好関係を代々築いていく原点と象徴でもあると思うようになった。中日交流の歴史を心に銘記し、共に今後の友好関係を構築する努力が必要である。深刻な新型コロナウイルスの危機に直面している今、互いにマスクや防護服などを寄付し合う交流の中、共通文化の漢詩は新時代の「甍」として両国の人々の心を温めた。中日両国人民が手を携えて疫病と戦う精神は『天平の甍』の鑑真と留学僧と同じだと思う。

確かに、中日両国の間には軋轢が生じたことがある。それにしても、中日関係は遠ざかるのではなく、より強い絆で結ばれるようになったと思われる。このことから、新時代の若者は「甍」の精神を受け継いでいくべきだと思う。雨にも負けず、風にも負けず、両国は必ず今の疫病の難関を乗り越えることができると信じている。そして中日平和友好の美しい未来がきっと切り拓かれるだろう。中日友好交流のシンボルとする「甍」を代々手渡していけるよう心から願っている。

井上靖の『天平の甍』

孤独ではないグルメ

北京師範大学
日本語学部4年
尚楚岳

毎日、寝る前に、ドラマ『孤独のグルメ』の主人公である五郎さんと一緒に日本の街を散歩したり、おいしいものを探したりすることが私の「日常」になっています。様々な町の風景を見ていると、自分も日本にいるように感じます。

「社交が苦手な日本人は多い」と、大阪に住んでいる友だちが教えてくれたことがあります。「やから、友だちが少なく寂しそうな人めっちゃおるで」と。五郎さんもそうなのかなと思ったこともありますが、このドラマを見れば見るほど、私の考えはだんだん変わってきました。

食事の前と後、日本人は常に感謝の気持ちを込めて「いただきます」と「ごちそう様でした」を、貴重な食材をくれた大自然へのお礼として言います。五郎さんも例外なく、

毎回微笑みながら丁寧に言います。静かに一人で食事をする彼は、きっとほかの人より新鮮な食材とおいしい料理を玩味することができると思います。一日三食という毎日行われる小さな幸せは、五郎さんにとって、期待感のあふれる芸術的な幸せなのではないでしょうか。

孤独の人しか体験できないことがあります。

2019年、大阪大学に交換留学していた私は一人で瀬戸内海芸術祭を見に行きました。毎日、「孤独」の私はマイペースで観光したり、おいしいうどんを味わったりして、直島や女木島などの離島も含め、香川県の魅力を満喫しました。特に小豆島に行ったとき、私はほぼ一時間かけて、お気に入りの「静寂の部屋」という小さな博物館をたっぷり鑑賞することができました。「一人で旅行に行ったら、同行者の気持ちを考えなくてもいいから、のんびりできる」と、一人旅が好きな人は多いです。お一人様の旅や食事を体験したら、私もだんだんその「孤独」が好きになってきました。

人は誰でもある程度孤独の人だと思います。五郎さんが訪れた店で飲み会やパーティなどをやっている人たちも必ず寂しいときがあるでしょう。しかし、孤独であるからこそ、生活の中にある小さな幸せに気づき、より深くその幸せを感じることができます。孤独であるからこそ、静かに考えることができ、生活の哲学を悟ることができます。孤独の人は不幸だというわけではなく、自分なりの幸せがあるということだと思います。

一人焼肉、一人カラオケなどの「一人文化」は日本で流行っていると、日本で過ごした1年間の中で私は実感しました。しかし、孤独の人は寂しいというわけではないと、私は思います。孤独の人にとって、世界万物が自分の仲間であり、その人たちは世界と会話しているのです。

五郎さんは孤独のグルメなのでしょうか。いや、彼は決して孤独ではありません。

(『孤独のグルメ』)

空気を読みながら、自分らしく生きていく

北京外国語大学
日本語学部2年
倪笑依

「張り詰めた空気。気まずい空気。おいしい空気。暖かい空気。我々の暮らしや幸せは思った以上にその場の空気に左右されている。」確かに、仕事の上などで大切な能力と

して「空気が読める」ことがある。しかし、空気は単に吸って吐くものだけではなく、心で感じて読むものでもあると思う。

空気を読みすぎるとかえって疲れ果ててしまう。ドラマ『凧のお暇』の主人公の大島凧さんはそんなタイプの人だ。職場の空気に敏感にアンテナを張っている大島さんは周囲の顔色を伺ってびくびくしながら毎日を送っている。天然パーマなのに、周りを不快にさせないために、日々日々大変な手間をかけてストレートにしようとしている。そのようにおどおどしていてストレスが溜まっている一方だった。ようやく限界が来て、過呼吸で入院した。だが、同僚も彼氏も、誰からも連絡をしてくれなかった。凹んで傷ついた彼女は思い切ってこれまで築いてきた人間関係を全部捨てて人生をリセットしてしまおうと思っていた。そこで都心を離れて自分探しの旅に出かけた。

実は、中国でも日本でも、大島さんのような「空気を読みすぎる」タイプの人がいっぱいいる。「空気を読む」はまさに中国語で「察言观色」という言葉にあっている。もともと優れた能力として認められていたのに、なぜ今では人を困らせることと考えられるようになったのか。それはやはり空気を読み「過ぎる」ということのせいだろうかと思う。相手に好かれているか嫌われているかと気になって先方に合わせてばかりいると、逆に自分を見失ってしまう。

さらに、全ての人に喜んでもらえるのは無理なのではないかと思う。人間は誰にでも欠点があるものなのだ。むしろひたすら人に合わせるのではなく、ありのままの自分であればいい。この世の中は多種多様な人々がいるからこそ、成り立っているからだ。

そうは言っても、人間は孤島ではなく、誰かとつながっているのだ。マルクスによれば人間の持つ社会的諸関係は人間としての特徴の一つである。したがって、人と接するのは避けたくても避けられないものだともいえる。大島さんもいずれ再び職場に戻るに違いない。しかし、戻っても、彼女はもう一度自分を見失うのではない。確かに職場を離れて自分探しの旅は彼女にとって一周回って原点に戻ったような経験だ。でも、輪のように同じところに戻ったというよりもむしろ螺旋階段のように迷いながら上に登っているのである。実は、我々には人を喜ばせる義務がない。話し相手に丁重に接しながら、素直に表したいことを言うといいのではないかと思う。その場の空気は相手と話し合いつつ、ともに作っていくものだからである。

したがって、必ずしも空気を読むことと自分らしさを保つこととは対立するわけではない。空気というのは吸って吐くものといい、感じて読むものといい、大切なのは、自分にあったやり方でバランスを取ることだ。

無縁社会

大連外国語大学

日本語学部 4年

詹鑫

ある日、「NHK スペシャル無縁社会—新たなつながりを求めて」というドキュメンタリーが、私の目を引いた。「無縁とはなんだろうか」と思いながら、そのドキュメンタリーを見ることにした。

「極当たり前の人生を送ってきた人達が、一人孤独に亡くなっていく姿を描いた—無縁社会」というナレーションと音楽で始まる。画面には主人公たちの姿が映る。両親に死なれ、一人ぼっちの吉澤さんは、NHK 放送センターに遺書を送った。同じマンションに住んでいた女性が誰にも気づかれずに亡くなった。自分も彼女のように独りで死んでいくではないかと考え、彼は自分が生きた証しとして遺書を綴ったのだ。番組が連絡を取り、相談に乗った後、吉澤さんは社会とのつながりを見つけようとする。彼はコミュニティの掃除をしたり、近くの小学校の子供達にプレゼントをあげたりする。そんなある日、吉澤さんの手に子供から感謝の手紙が届いた。「この手紙を見て、本当に一人じゃないなって思いましたね」と吉澤さんが言った…

ドキュメンタリーを見るうちに、私はなんだか暗い気持ちになった。死別、離婚やリストラなどで社会から切り離されるなんて、あまりにも辛いと思う。家族や友達に支えられて生活している私は、無縁社会の中で生きていることを実感することはできなかった。しかし、だからといって自分と無縁社会は全く関係ないとも思えない。主人公たちもかつて様々な繋がりを持って生きていたが、意外なことに遭い、無縁になってしまったのだ。何かをきっかけにして誰でも無縁の状況に陥る可能性があるかと強く感じた。私は周りの人との絆をもっと大切にしたいと思った。

ドキュメンタリーの終わりに、「人と人が生きていくのは頼って頼られて、それでいいじゃないか」と、取材班の人が言った。抑圧的な映像の最後、この一言の優しさに感動し、何だか救われたと思った。確かに、無縁社会を有縁社会に戻すことは難しい。だが、NHKの取材班、各地のNPOの関係者のように、状況の改善のために努力している人も多くいる。その人たちの姿を見て、ほんの少し手を伸ばすことできっと何かを変えられるかもしれないので、私も自分で何かをしたいと思った。

今、日本では未婚率・離婚率の向上に加え、少子高齢化も進んで、無縁社会が拡大しつつある。内閣府によると、2017年、他人との絆がなく引きこもった人の人数は54万を超えたという。一方、2017年タオバオが発表した調査によると、中国では異郷で一人暮らしの若者が5000万人に達した。これから中国は無縁社会の道に踏み込むことになるのではないかと心配になる。我々はこの問題に無関心なら、将来さらに孤立した無縁社会を作り

出してしまうかもしれない。どうやって無縁社会に歯止めをかけるのか、中日のすべての人が考えなければならないことだと思う。

- ・NHK スペシャル「無縁社会 新たなつながりを求めて」

日本との出会い—おいしい話から心へ

河北大学
日本語学科 3年
閻芋婧

「ねえ、いつ日本に行く？『孤独のグルメ』を見て日本料理に心を奪われた！」と大学に入ったばかりの頃に友人に誘われた。その頃、私は日本のことをあまり知らなかったし、日本文化を知る機会もなかった。いきなり聞かれて、言葉そのものを勉強するだけでなく、日本を知る必要もあるのではないかと思った。

そこである夜、日本のことをほとんど知らない私は、好奇心から『孤独のグルメ』を見ることにした。一人で働く主人公の井之頭五郎が、様々な場所で商売をし、仕事の合間にその場所の美味しいものを食べていく物語だ。ドラマの中では、五郎はいつも一人で食事をするが、そのスタイルがとても新鮮だ。彼が夢中になって、食べ物を味わい尽くす姿は一人だからこそ伝わってくる、独特の魅力があるのだと思う。

料理屋を捜す五郎の歩みに、実際の日本の街並みが見えてくる。ぎっしり立ち並んでいる店や、可愛らしい字の書かれた看板、慌ただしい通行人や、きれいに整備された道など。日本には中華料理店がたくさんあるのを見て、楽しい気持ちがより強くなった。これは飲食文化の交流ではないでしょうか。また、五郎は毎回違った分野のお客と商売をするので、そのやり取りを通じて、日本社会の多彩な姿を垣間見ることができる。画面に映し出される日本の風景やドラマのシーンが、少しずつ頭の中で日本のイメージを描いていく。今まで持っていた日本に対する想像とはまったく違ったものになった。

ある日本人留学生との経験を思い出した。これまで、私の印象では日本人はとてもシリアスだと思っていたから、初対面ではとても緊張した。しかし、留学生のお姉さんはとても優しく微笑んで、私に話しかけてくれた。そのうち、私を友達のようにして昼食へ引っ張って行った。彼女と食事をするとき、「いただきます」を言うのかな、などと注意したことも、今考えると面白い。

私たちはまだ何事も知らないうちから、何かステレオタイプのイメージを持っているようだ。しかし、すこし分かってくると、その印象は現実的な世界に姿を変えていく。『孤

『孤獨のグルメ』は私が日本を知るきっかけになった。ドラマの中のすべての話は日本の印象を生き生きとしたものにしてきている。

中日戦争という不幸な歴史があったため、本能的に相手国の人に悪い印象を持ったり、交流の機会が減ったことは否定できない。しかし今では、インターネットや観光などを通じて、情報や人が海を越え、お互いの国を体験できる機会も増え、相手を理解することに情熱を傾けている人が増えてきていることも事実だ。そして、そのことを私は日本語専攻の学生として非常に嬉しく思う。中国と日本が本当に素晴らしい友好関係を築けるよう、心から願っている。

(『孤獨のグルメ』)

さようなら、偏見

西安交通大学
日本語学科3年
張佳穎

——「お久しぶりです、武漢」についての感想文

『武漢のありのままの姿を世界に伝えたい。一方で、武漢に行くのが怖い。そんな思いで始まったこの作品。撮影を終えた今、感想を一言でいうと、「もう一度武漢に遊びに行きたい!』』

2020年6月29日、私は「お久しぶりです、武漢」を見た。

「お久しぶりです、武漢」は南京在住の日本人監督の竹内亮が撮影して、武漢の人々が新型コロナウイルスとの闘いとその後の武漢を描くドキュメンタリーである。

「このドキュメンタリーの最大の目的は武漢の現状を全世界に紹介するのである。というわけで、世界の人々が知りたいこと、例えば、華南海鮮市場や雷神山病院、最前線で奮闘した医療従事者や専門病院を建設した人などもそのままドキュメンタリーに描くのだ。」

と、竹内さんはインタビューでそう言った。

国内では新型コロナウイルスとの闘いに関するドキュメンタリーも少なくないが、外国人が撮影したのを見たのは、私にとって初めてのことだった。

このドキュメンタリーを見た後、私は武漢人の犠牲や痛みを心に痛み、彼らの勇敢さや強靭さに感動した。でも一番の感想は、やはり監督の竹内さんへの尊敬の念だ。

なぜなら、彼は敢然と偏見を捨てたのだ。

世の中で偏見はどこにでもある。

偏見が起こることは中国国内とて例外ではない。コロナの新規感染者がゼロでも、町の封鎖が解除されても、武漢は「コロナウイルスの街」なのだ。

「お客さんは武漢の品物だと知ったら、すぐ注文をキャンセルしてしまうんだよ。」

と、この前に雷神山病院の建設に参加したある労働者はドキュメンタリーで竹内さんに対し、苦笑いをしながら仕方なさそうに言った。

海外において、迅速に感染拡大を抑制しても、難しい局面を乗り越えても、中国は「新型コロナウイルスの発生源だ」というレッテルを貼られた。多くの外国人は中国人を「ハイリスク・グループ」にし、公然と中国人を差別している。更に、ある国は「新型コロナウイルス」を「チャイナウイルス」と呼び、公に中国への偏見を示している。

世の中で偏見はどこにでもあるという前提の下で、異邦人としての竹内さんは積極的に偏見を捨て、未知への恐怖を克服して武漢に行った。それから、現地調査を行って現状を知り、ドキュメンタリー映画を作って客観的な情報を全世界に伝えた。これは尊敬すべきことではないだろうか。

私は竹内さんを尊敬する。そして、竹内さんのような人になりたいとも思った。

私は将来、竹内さんのように偏見を捨て、積極的に現場に行き、現物を手に取り、現実を自分の目で見て確かめたい。そして中日両国のパイプ役になりたい。実際の日本の社会を自分の目で見、耳で聞き、心で理解し、中日両国の国民がお互いに対する誤解や偏見を失くし、真の友好関係が築けるように。

(竹内亮「お久しぶりです、武漢」)

自分の価値というのは

北京語言大学
東方言語学部日本語専攻2年
李林億

初めて『銀河鉄道の夜』を読んだのは、確か小学生の頃だった。父は行方不明、母は病気に伏すジョバンニは毎日アルバイトで忙しく、学校では常に級友にからかわれている。だが、幼馴染のカムパネルラに限ってはジョバンニをバカにせず、時には彼を家に招くこともあった。しかしその唯一の友カムパネルラも、意地悪好きな同級生を救うために彼から離れて行ってしまった。そのようなジョバンニを私は気の毒に思い、そして、彼に幼かった自分の姿を重ねた。

それはまだ小学生の時、友達が一人も出来ず、仲良くしてる同級生たちを教室の隅から眺め、一人寂しがっている私だった。あの時の私は、多分カムパネルラのことを少し恨んでいたのかもしれない。ジョバンニの唯一の友であるにもかかわらず、なぜ自分の命をかけてまでジョバンニをいじめた子を助けるのだろうか、当時の私には理解できなかった。

大学生になった今、再びこの本を手にとって読むと、異なる視点でカムパネルラの行動を捉えることができるようになった。本当に大事なものは、他人が私に何を与えるかではなく、私が他人に何を与えられるかということだ。宮沢賢治さんが『銀河鉄道の夜』を通して伝えたかったのは、多分こういうことだろう。

小学生の私は人との交流が苦手で、人と会話するのを避けてばかりいた。なのに、誰かが向こうから話しかけてくれるのを待っていた。ところが、中学校に入学して、学級委員長を務めてからというもの、状況が一変した。放課後に残ってみんなと教室を掃除したり、クラスで計画を立ててイベントを行ったりしたことで、自分がクラスの一員だということを実際に感じられた。運動会で汗みずくになりながら、声を枯らしてクラスの選手達に大きな声援を送ったのも、実に楽しいことだと思えた。そのような一つひとつの小さなことを積み重ねていくうちに、自分の存在価値を実感することができ、新たな世界が目の前に開けた。

現代社会において、人々は人生に迷って方向を見失ってしまう時があるだろう。それは、心の中に帰属感がないからかもしれない。小学生の私と同じで、誰かが自分に手を貸してくれるのを待っているかのようだ。しかし、単に一方的に何かをしてもらうだけでは、自分がグループの一員として存在しているという帰属感は得られないのだ。他者に働きかけ、自ら主体的に他人に貢献してこそ、自分と他人との間に繋がりができ、心身を充実したものにするのでないかと私は思う。

物語の最後には、友人の死を知ったジョバンニが一人で家へ走っていく。彼はカムパネルラのことをどう思っているのか。彼の選択を理解し、物語で先に言った「本当の幸い」を探そうとするのだろうか。私もジョバンニと共に、自分自身の価値を見出し、誰かの役に立ちたいと思う。

感想文対象：小説『銀河鉄道の夜』（著者：宮沢賢治）